塚崎昌之さん 追悼文集

2022 年 8 月 佐渡フィールドワーク by 竹内康人

＜目次＞

●わが畏友よ、また飲みましょう　谷合佳代子　０２
●弔辞（2023 年 9 月 20 日の告別式で読んだ弔辞）　庵逧由香　０２
●僕の「ソンビ」、塚﨑さん　韓光勲　０３
●塚﨑昌之様へ　平井啓三　０４
●「もっと教えていただきたいことがありました」　武田　肇　０５
●紙と穴を探った歴史家・塚﨑昌之　坂本悠一　０６
●仙人になりたかったのですね、塚﨑さん　黒川伊織　０６
●塚﨑さんのフィールドワーク　高野昭雄　０７
●塚﨑昌之　追想　水野直樹　０８
●光明池共同墓地に残る朝鮮人青年の墓石調査 ご報告　三宅美千子　０９
●塚﨑さんの思い出　石川亮太　０９
●父親として、教員としての姿―私の垣間見た塚﨑さん　川口祥子　１０
●歴史家塚﨑昌之さん、在野研究者の矜持と意地　川瀬俊治　１１
●庶民の足跡をたどり、庶民の中で生きることを志向した人　太田修　１２
●塚﨑昌之さんの早すぎる死を悼む　横山篤夫　１３
●塚﨑さんの思い出　堀内　稔　１４
●塚﨑昌之さんの仕事　竹内康人　１４
●残念です、色々ありがとう　徐根植　１６
●「冬のＴシャツ姿」　中田光信　１７
●あなたは私よりずっと若いけれど、ずっと尊敬する大好きな恩師でした　橋本　徹　１７
●追悼・塚﨑さんとの思い出　下嶌義輔　１８
●塚﨑さん、さようなら　遠藤　努　１８
●追悼、塚﨑昌之さん・・・大切な仲間を失う！　櫻井秀一　１９
●塚﨑塾の思い出　亘　佐和子　１９
●塚崎昌之さんと一緒に行った地下壕のフィールドワークの記憶　韓程善　２０
●大阪空襲「空白」の歴史　塚﨑昌之さんが作成した朝鮮人空襲犠牲者名簿と冊子　文箭祥人　２１
●組合の反主流派の活動、そして地元パネル展の親切なボランティア監修者などいっぱいの活動　三上弘志　２２
●「牧さん、行くでしょ！」　川口　牧　２３
●資料提供・助言に心より感謝申し上げます　相可文代　２３
●塚﨑氏の無念　中河由希夫　２４
●追悼、塚﨑さん―阪大生に教えてくださった、身近な空間から考える戦争の歴史　北原　恵　２５
●「最後の電話」　飛田雄一　２５

●塚崎昌之・著作目録（石川亮太作成）　２７
●新聞記事　３１

●わが畏友よ、また飲みましょう
谷合佳代子（エル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）館長、京都大学文学部の同級生）

塚﨑さん
いや、塚﨑くん
いやいや、学生時代のように「ツカサキ」と呼び捨てにしてもいいですか。
もう 45 年以上の付き合いになりますね。「わんわん」こと大田季子さんともども家族ぐるみのつきあいで、穂（みのり）ちゃんが生まれたときも、光（ひかり）ちゃんが生まれたときも、幼い二人を抱っこさせてもらいましたよ。あなたは本当に子煩悩な父親で、愛くるしい娘たちを目の中に入れても痛くないというように破顔で抱っこしていましたね。あなたのその姿が今でも目に浮かびます。
あなたは権力を憎み、差別を憎む、正義感あふれる男でした。その生き方はずっと変わらなかったです。あなたたち夫婦は大酒飲みで、毎晩のように二人で一升瓶をころがしてましたっけ。わたしもお酒は大好き。しかし「ツカサキには負けるわ！」といつもあきれていました。好きな酒を飲んで逝ったのなら本望かもしれないけれど、まだまだあなたにはしてもらわないといけないことがたくさんあったのですよ。
あなたは新しい論文を上梓するたびに抜き刷りをわたしの職場に送ってきてくれました。ちゃんと感想を送ることもほとんどせず、申し訳ないことをしてしまったと今では唇を噛んでいます。あなたの根気強い調査と資料の渉猟ぶりにはいつも舌を巻いていました。最後に抜き刷りをもらったのはわたしではなく、つれあいの鄭良二（チョンヤンイ）でしたが、「わあ、塚﨑くんがまた書いたのか、すごいね」などと軽口を叩きながら、まさか遺作になるとは思ってもいませんでした。
わたしはぜひともあなたのガイドで大阪城を歩いてみたかったです。「今は仕事が忙しすぎるから無理だけれど、あと数年もしたら少しは時間ができるだろうから」と高をくくっていたのが大間違いでした。二度とそのチャンスは巡ってこないのだという事実に打ちのめされています。
あなたの愛娘たちはすっかり大人になり、親の世代に負けない社会貢献をしています。親からたくさん愛情をかけてもらって、親の背中を見て育った自慢の子どもたちですね。これから、わんわんが寂しい日々を過ごすことがあれば、一緒にあなたを偲びながら一献傾けます。
思い出は尽きないし、言葉にならない悲しみでわたしの胸は満たされています。ほんとうに残念でなりません。
ツカサキ、そっちに行くまで待っててね。

●弔辞（2023 年 9 月 20 日の告別式で読んだ弔辞）
庵逧由香

塚﨑昌之さんのご霊前にお別れの言葉を申し上げます。突然の訃報に、いまだに信じられない思いです。日本全国だけでなく、韓国からも、たくさんの方々から、代わりにお悔やみを伝えてほしい、という連絡が私のもとに届いています。
塚﨑さんとは、朝鮮人強制動員真相究明ネットワークで、朝鮮史研究会関西部会で、十数年以上にわたり、ご一緒してきました。私が関西にきた時にはすでに、塚﨑さんは、高校の先生をされる傍ら、関西の在日朝鮮人研究、そして朝鮮人強制動員研究で、先進的な研究成果を出されている先輩研究者でした。どんな研究や発表にも誠実に向き合おうとする真摯な研究態度に、研究者仲間の中でも、全幅の信頼を置かれている方でした。また研究者として後進の育成にも熱心で、同じような分野やテーマに関心を持つ若手研究者には、自分が苦労して集めた資料でも、いつも惜しげもなく提供してくださっていました。
真相究明ネットワークは、朝鮮人強制連行の歴

史を明らかにし、被害者の救援を支援するための全国運動組織です。塚﨑さんは欠かさず事務局会議に参加され、一年に一回全国各地を回りながら開催する全国集会では、各地の研究成果を発表してくださいました。時間をかけて収集した膨大な資料を駆使して全体の構造や矛盾を分析する塚﨑さんのご研究に、たくさんのことを学ばせていただいていました。こうしたご縁もあり、立命館大学文学部で、「東アジア現代史論」という講義を担当していただいたこともありました。学生たちに評価の高い授業でした。

塚﨑さんも私もビールが大好きで、会合では打ち上げに参加して、いつも最後まで残る、というところも同じでした。朝鮮史研究会の例会ではよく、二人とも二次会、三次会まで残っていろんな話をしました。また塚﨑さんは、フィールドワーク案内の達人で、いつもいろんな方々から、フィールドワークの案内をお願いされていました。私も、二十人くらいの学生を連れての鶴橋フィールドワークや、島本、宇治、真田山の戦跡地など、塚﨑さんに案内していただいた場所は、数えきれません。塚﨑さんはいつも、とても分厚い資料を用意して、丁寧に説明してくださっていました。

そんなフィールドワーク好きとビール好きという二つの共通点から、二人で「ビールを美味しく飲む会」というフィールドワークの同好会を作ったこともありました。これは塚﨑さんと参加者がビールを飲みながらフィールドワークをする、というだけの会ですが、案内役の塚﨑さんへの謝礼は、ビールを好きなだけ飲んでもらうだけ、という条件なのに、いつも快く引き受けてくださいました。実は後から他の参加者と、「普通に謝礼をした方が、安かったのでは？」と冗談で話していたものです。

こうお話すると、「いやいや庵逧さん、それは過大評価だよ」と謙遜する塚﨑さんの声が、今にも聞こえてきそうです。

塚﨑さんは、お二人の娘さんたちの話題になると、いつも必ず目を細めて、とても嬉しそうにお話してくださいましたね。どれだけ自慢に思ってらしたか、いつもと全く違うお声からも、よくわかりました。

塚﨑さん、これからもやりたい研究も活動も、たくさんあったことでしょう。私たちも、塚﨑さんにもうお会いできないなんて、本当に辛く、まだ信じられません。私たちは、せめて少しでも塚﨑さんのご遺志に添えるよう、これからも研究でも、活動でも、精一杯、努めていきたいと思います。どうぞ、安らかにお眠りください。

二〇二三年九月二十日

●僕の「ソンビ」、塚﨑さん

韓光勲 （31 歳、大阪公立大大学院博士後期課程）

塚﨑さんに初めて会ったのは１０年前。塚﨑さん主催のフィールドワークに参加した。古い新聞を片手に歴史を語る。高槻地下倉庫（タチソ）だったと思う。何もわからず、ただ塚﨑さんのガイドに従って歩いた。フィールドワークのあと、一緒にビールを飲んで、カラオケへ。ソ連の「インターナショナル」をみんなで合唱していて驚いた。

再会したのは去年。2022 年 5 月、僕は新聞記者の仕事を休職して、研究の真似ごとを始めていた。歴史家、姜徳相のオーラルヒストリーを読んで、感銘を受けて、研究を始めようと思った。塚﨑さんは「それは姜徳相先生の記述が不正確なんじゃないかな」と指摘してくれて、それはたしかにその通りだった。オーラルヒストリーでも、実証的に読む必要があるのだ。ありがたかった。こんなにちゃんとした指摘をしてくれるのは 1 人の研究者として扱ってくれた気がして嬉しかった。

僕は会社を辞め、大学院博士課程への準備を始めた。青丘文庫では、今年の 6 月までに 5 回発表させてもらった。

６月の発表では、在日コリアンのラッパーにつ

いて発表した。塚﨑さんは面白がって聞いてくれ、「どんなテーマでもやれるんやね」と言ってくれた。「僕は青丘文庫で 50 回発表した記録を持ってるけど、僕の記録も抜かれるね」とも。僕は恐縮したのだが、塚﨑さんは優しい笑顔でそう言ってくれたので、「まだまだたくさん発表しなさい」という趣旨で言ってくれたのだと思う。

ある研究会の帰り、塚﨑さんから「どこに住んでるの？」と聞かれ、「芦原橋、大正とかその辺です」と答えた。「そうかあ、あのへんもいろいろあるからね。今度一緒に歩こうか」と言ってくれた。「はい、勉強させてください」と僕は返した。塚﨑さんは、僕の生まれた場所を歩いて、何を教えようとしたのだろうか。そのことを聞いてみたかった。浪速区や大正区をめぐる在日朝鮮人史を、塚﨑さんの口から直接聞きたかった。もう、叶わない。なんで、すぐに連絡して、聞かなかったのだろうか。悔やんでも仕方ないのだけど。

塚﨑さんは日本人だが、在日韓国人である僕にとっては、「ソンビ」のような存在だった。会うたびに、優しい笑顔でいつも何かを教えてくれる。それがまた面白くて、もっと聞きたくなる。研究への指摘は正確無比で、僕はその指摘を活かして論文を修正していた。

塚﨑さんは 20 年かけて、博士論文を出された。「僕はなんで朝鮮人が大阪に来たというところから話を始めて、戦前の歴史を全部やりたくてね。20 年かかった。提出したものは 700 ページを超えていた」と聞かせてくれたことがある。

僕はいま、博士論文を書こうとしている。塚﨑さんに読んでほしかった。間違いを指摘してほしかった。喜んで読んでくれただろうと思うし、喜んで指摘してくれただろうと思う。

塚﨑さんの残された研究、博士論文をまずはコピーするところから始めよう。塚﨑さんの実証主義には到底及ばないが、その「構え」や「態度」のようなもの、その気分だけでも学びたい。塚﨑さん、安らかにお眠りください。

●塚﨑昌之様へ

平井啓三（ＮＨＫ記者）

あなたが亡くなってからもう１ヶ月が過ぎようとしている。私は、いまだ塚﨑ロスのママだ。

私は、奈良局時代、２００２年、塚﨑さんに最初にお会いした。奈良県天理市で地元の高校教師の方々が戦争遺跡の裏づけをされていた旧大和海軍航空基地、柳本飛行場跡の調査をされていたときに来られた。米軍が本土に上陸した後、大阪・八尾から陸軍が、天理から海軍が特攻隊を飛ばす計画で、そのため天理には天皇がいるための御座所跡があり、死地に行く若者に手を振る計画だった、立案者は特攻隊の産みの親、大西瀧治郎中将だと教えて頂いた。シャープで何よりも専門的な見方だなと驚いた。この取材はそのまま放映された。

そして、大変、お世話になったのが、大阪局に移り、大阪での朝鮮人強制連行を調べられていた塚﨑さんの姿を追ったドキュメンタリーだった。２００５年。塚﨑さんの蓄積された資料、そして崇禅寺のお寺に埋葬されている墓碑などの調査に加え、韓国の真相究明委員会の資料も入手され、大阪府に真相を明らかにするように粘り強く交渉されていた。ちょうど、この時期に、強制動員真相究明ネットワークが発足、それも映像に入れさせて頂いた。塚﨑さんの「亡くなった朝鮮人の生きていた様（さま）を歴史的にでもよみがえらせてあげたい」という思いが伝わってくるような活動で私は圧倒された。これに対し、

情けなかったのは、強制連行という文字が当時、会社内で使えないようになっており、「強制連行を追って」が「連行を追って」というように改題、なかの表現も変えられた。もちろん、なかで、最大限の闘いはしたが、上下関係の力で敗れ、塚﨑さんに平謝りに謝った。「ほんとうにしょうがな

いね」とおっしゃりながら、許してくださったが、申し訳ない気持ちで一杯だった。

その後も、歴史検証の企画ニュースでは、必ずといっていいほど、塚﨑さんに相談にのってもらっていた。２０１６年には、福林徹さんという元高校教師の方（この方も故人です）が、アメリカの国立公文書館で、大阪陸軍造兵廠枚方製造所の様子を、米軍が終戦直後にとった写真を見つけられ、それを取材、報道する際に、やはり塚﨑さんがかけつけてくだされ、福林さんとの仲を取り持って頂くと共に、的確なコメントをいただいた。本当にありがたかった。

実は、この間も、在日コリアンの人たちのおがむ場所、龍王宮、また朝鮮寺をめぐるフィールドワークにも連れて行って頂いたり、そして、わたしはなによりも、さわやかな性格の塚﨑さんとご飯やお酒をご一緒することがとても楽しかった。

塚﨑さん、本当にありがとう。私はできることは千分の１もみたないと思う。しかし、在日朝鮮人の歴史、強制連行の歴史を明らかにするうえであと１歩頑張ろうと思います。

●「もっと教えていただきたいことがありました」武田肇（朝日新聞記者）

新聞記者にとって、近現代史における負の歴史を伝えることはきわめて重要の仕事だ。「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目となる」というワイツゼッカー西ドイツ大統領の明言は、かつて侵略戦争に加担した新聞社で働く日本の記者こそ、深く胸に刻まなければならない。そのテーマのひとつが、戦時中の朝鮮人強制連行であることは論をまたない。

ところが、この２０年余り、加害の歴史を取り上げた記事が、ネット上で激しく攻撃されるようになった。萎縮しないつもりでいても、根拠や出典をしっかり確認しなければ足をすくわれ、逆に「書けば面倒なことになる」という空気を増幅する。そんな中、塚﨑昌之さんは本当に頼りになる人だった。

メールで問い合わせれば、数日も経たず、膨大な公文書や論文のＰＤＦが送られてきた。たとえば２０２１年１１月２１日付朝日新聞大阪版で掲載した、大阪府高槻市にある戦争遺跡「タチソ」（高槻地下倉庫）に関する記事は、塚﨑さんに教えていただいた公文書をもとに「朝鮮人労働者は約３５００人」「国の労務動員計画に基づき強制的に連れてこられた多数の人が含まれていた」「疥癬が流行しても医療施設がなく、罹患者は放置された」と書いた。むろん抗議は来なかった。

実は塚﨑さんとのつきあいが深まったのは最近だ。筆者は２０年１月、３年弱のソウル支局勤務を終えて大阪社会部に戻り、「新聞うずみ火」から講演を依頼されたが、その聴衆のひとりが塚﨑さんだった。講演後、私が自信満々に解説した「徴用工問題」について、一部正確でない点があると指摘を受けたことが関係が深まる契機だった。その後、西九条の立ち飲み屋で痛飲し、指摘の内容は正確に覚えていないが、博識ぶりと研究熱心さに舌を巻き、密に連絡するようになった。

大阪大空襲の朝鮮人犠牲者の実態調査にかける強い思いも、印象深い。筆者は戦後６０年にあたる０５年から大阪大空襲の取材に取り組んできたが、朝鮮人犠牲者の取材については、事実上の空白だった。資料は乏しく、実名で証言できる被災者や遺族も容易に見つからないためだが、その壁を塚﨑さんは仲間とともに突き崩した。２１年３月、朝鮮人犠牲者の初の追悼集会が大阪市で開かれたときは、私もパズルの最後のピースが埋まったような感慨があり、涙が出た。

あまりにも早すぎる死でした。もっと教えていただきたいことがありました。本当にありがとうございました。

第３次大阪大空襲で死傷者が運びこまれた崇禅寺（大阪市東淀川区）で資料を手に語る塚﨑昌之さん。空襲の被災者で、遺族でもある在日コリアンの鄭末鮮さんと一緒だった＝２０２１年６月７日、武田肇撮影

●紙と穴を探った歴史家・塚﨑昌之
坂本悠一

彼との初対面は、1990 年代後半に私が北海道から北九州に転職して以降のことであった。毎月開催される「朝鮮史研究会」「在日朝鮮人運動史研究会」「十五年戦争史研究会」の各例会に出席して、終了後の「懇親会」と称する呑み会には上戸の彼とは共に「皆勤」であった。つまり共に議論し杯を交わすこと毎月 3 回、すぐに親密な仲間となりその誠実な人柄もあって畏友となった。さらに全国各地や韓国でも開かれた「強制連行研究交流集会」では、文字通り寝食を共にして拙い語学力を競い合ったりもした。共同研究としては、①「タチソ＝高槻地下倉庫」、②『帝国支配の最前線』（吉川弘文館 2015 刊行)、③「鶴橋キョンチャル・アバート」が挙げられるが、諸事情が重なり共に名を連ねたのは②に留まった。

その研究の手法の特徴は、歴史学では当然だが史料の博捜にある。特に在日朝鮮人に関する新聞記事の閲覧と収集はその眼を痛める程徹底したものであった。また一次史料の発掘も怠らず、防衛研究所でタチソの朝鮮人労働者に関する警察史料を見つけた時は手を取り合って喜びあった。今彼が書き遺した辞典の改訂で該当項目に補筆しているところである。もう一つは現場主義つまりフィールドワークによる戦争遺跡の調査である。山男である彼が地下トンネルに潜るというのも皮肉だが、ブッシュの中から入り口を探す「藪漕ぎ」はさすがに見事なもので、交差点に立てば縦横おおよそのメッシュを目算できたのだ。

彼の論文は総数数十に上るが、いわゆる「単著」がなく関西大学に提出した博士論文に延々と補筆し続けて未公刊のままである。何とか早く日の目を見れるよう切望している。

最後に私も沖縄で会ったことのある自慢の娘太田光さんが、沖縄戦の学徒隊を研究している人物として『赤旗日曜版』9 月 10 日号一面全体に顔写真入りで大きく掲載された。すぐに電話したのだが既に病床に伏していたのであろう、応答はなく 16 日に永眠した。彼も私も共に無神論者であるから「冥福」は祈らない。 合掌

●仙人になりたかったのですね、塚﨑さん
黒川伊織

2017 年 10 月、東京での学会参加のため始発の新幹線に乗る前、新大阪駅のキオスクに並んだら、偶然にも塚﨑さんがいらっしゃいました。あごひげ伸び放題の塚﨑さんの姿に驚愕した私は、「丸木位里と和田春樹を足しっぱなしにしたみたいや！」と叫んでしまいました。あのお姿は仙人を目指されてのことだったのですね。でも、その時のハンチングを被ったジャケット姿は、とてもお似合いでしたよ。

はじめての塚﨑さんのフィールドワークへの参加は、丹波マンガン記念館でした。当時小学校 3 年生だった息子を連れていったところ、昼ご飯中に、「みんなは入れない秘密の狭いトンネルに行こう」と塚﨑さんが息子を誘ってくださいました。当時小太りであった息子は、塚﨑さんに「その腹じゃ、トンネルでつっかえるな！」とゲラゲラ笑

われたそうです。「小学校 3 年生に向かってあの言葉はないわ～」と、塚﨑さんのお通夜の帰り道にその一言を思い出した息子は、ひとり泣き笑いしておりました。

それからというもの、フィールドワークのたびに忠犬のごとく塚﨑さんのあとをついて回っていた息子ですが（塚﨑さんは「師匠」なのだそうです)、息子が長い病気と反抗期で大変だった 10 代の多感な時期も、塚﨑さんのフィールドワークは息子の支えでした。「塚﨑さんのフィールドワークあるよ」と息子を誘うと必ず参加して全行程を歩き、そして飲み会までついてきていたものでした。

私たち親子が塚﨑さんのフィールドワークに最後に参加したのは、コロナ禍のなかでの生駒の朝鮮寺フィールドワークでした。帰りに鶴橋の焼肉屋に行き、息子が「もう 21 歳になったんで酒飲めますよ！」と塚﨑さんに報告したところ、「お前が、ついに堂々と飲める年になったんか！」と、大変喜んでくださったとのことです。でも、「お前は若いから肉を食え！」と塚﨑さんに命令され、飲んだくれる塚﨑さんのそばで、ひたすら肉を焼いて食べ続けていた息子だったのでした。

日本のアカデミアのなかで重視されるのは大学での肩書きです。そんな世界で塚﨑さんも私も生きてきました。会社員と研究者を兼業している私自身、心が折れそうになる時があります。でもその辛さが私の力となっているように、塚﨑さんにとってもそうであったのかもしれません。塚﨑さんは、唯一無二の存在でした。どうか安らかにお休みください。

●塚﨑さんのフィールドワーク

高野昭雄

塚﨑さんは、様々な団体に頼まれ、ＦＷを実施されていた。そのため休日や研究時間がさらに無くなっていた。ＦＷの一番弟子は、当時小学生だった黒川伊織さんの息子さんで、私も三番弟子？くらいにはしていただいていた。下記は、私がご一緒させていただいたＦＷ一覧である（猛暑日・極寒日が多かった)。これら以外にも、タチソや屯鶴峯、桃山御陵、三国、真田山墓地などにも連れて行っていただいた。私は、塚﨑ＦＷファンであった。

高校までを大阪で過ごした私には、小学校の遠足で訪れたり、通過したことのある懐かしい場所に、戦争の傷跡や在日朝鮮人の足跡が数多く残っていることが驚きであった。幸いファンとしてＦＷ資料はきちんと残している。これから再訪していこうと考えている。

1　理想的田園都市・千里山と朝鮮人、そして戦争　20080720
2　枚方・交野に朝鮮人の足跡＋戦争の傷跡をたどる　20081124
3　大正区・消えた朝鮮人の足跡　2009125
4　築港の歴史を歩く～軍事拠点とリゾート地～朝鮮人・中国人の苦難と闘い　20090804
5　神崎川と朝鮮人―晒工業を中心として　20090805
6　大阪城周辺における戦争遺跡と朝鮮人の足跡をたどる　20090807
7　済州島女性の祈りの場「龍王宮」と大川周辺の朝鮮人　20100117
8　夕陽丘から天王寺界隈を歩く―大阪空襲の跡・未だに故郷に帰れぬ朝鮮人の遺骨　20100731
9　朝鮮通信使の跡地　大阪の「近代」化と川口居留地　松島遊郭と第一次大阪空襲　20100827
10　生駒山麓に朝鮮人の足跡をたどる《旧生駒トンネル・朝鮮寺・額田の針金》　20110321

11　茨木市における朝鮮人の足跡をたどる～阪急京都線の建設と安威川改修工事　20110722
12　光明池築造工事と朝鮮人労働者　20151031
13　李垠・方子・玖一家も関わった戦意高揚・楠公遺跡ルートを歩く　20160128
14　歴史的事実に目を向ける楠木『伝承地』とはなにか　戦争遺跡フィールドワークに見る近現代の島本町の歴史　2010678

●塚﨑昌之　追想

水野直樹

今年 9 月、塚﨑が心臓関係の病気で入院していると聞いた時はそれほど心配しなかったが、その翌日に死亡を知らせるメールが届いた時には、本当に「嘘やろ」「信じられへん」しか言えなかった。(学生の時から「塚﨑」と呼んでいたので、ここでも「さん」抜きで書くことにしたい)

私より何歳も若い塚﨑、寒い季節でも T シャツ姿だった塚﨑、研究会ではいつも元気に発言をしていた塚﨑、そして飲み会では私の何倍も早いペースでビールを飲んでいた塚﨑――そんな姿を思い浮かべると、やはり死んだことが嘘としか思えない。

40 数年前、私が大学院生だった時に、塚﨑は同じ学部の学生だった。しかし、所属する研究室が違うだけでなく、私も塚﨑もあまり研究室に顔を出さなかったからだと思うが、それほど親しかったわけでない。しかし、私が朝鮮の近代史や在日朝鮮人の歴史を勉強していることを聞き知った塚﨑が、「一緒に勉強会をしてもらえないか」と言ってきた。私にチューターの役割を期待したようだった。

何人かで勉強会を始めることになったが、私もまだまだ「初心者」だったので、彼が期待したような役割ができたわけではない。塚﨑は学生の活動や山登りに忙しかったようで、私も市民運動に時間をとられていたので、勉強会以外の場で話をすることもほとんどなかった。一緒にビールを飲みに行ったという記憶もない（お金もなかった)。

それから 30 年近くたって、まだ大阪で高校の教員をしていた時期に朝鮮史研究会や在日朝鮮人運動史研究会の例会で顔を合わせることになった。研究会の後、飲み会に行くと、塚﨑の方はいつも大学時代の勉強会のことをなつかしそうに話していた。その頃には教員の仕事をやりにくい、自分の思いと違ってきていると感じていたから、学生時代をなつかしく振り返っていたのかもしれない。

その後、塚﨑が在日朝鮮人の歴史やそれと関わる形で大阪の近現代史を精力的に研究するようになった頃のことは、多くの人が知っているので、ここでは書かないことにする。

東京出身の塚﨑は、細身の体だったからか「シティ・ボーイ」の雰囲気を感じさせたが、一方で真冬でも半袖の T シャツ一枚で過ごす「バンカラ」風の若者だった。50 歳くらいからは、さすがに冬の半袖 T シャツ姿は見なくなったが、それでもかなり薄着だった。

研究会などでの発表は、写真などを見せながら話をすることが多く、内容はわかりやすいものだったが、話し言葉の聞き取りにくさは、学生時代と同じだなと感じさせた。それは滑舌の悪さだけが原因ではなかったと思う。もともと東京言葉（江戸下町の「べらんめえ調」）だったのが、京都・大阪での生活が長くなって関西弁が混じるようになった。そのためか、私のような関西人には聞き取りにくいと感じさせることになったのではないだろうか。

最後に、塚﨑について私が誤解していたことを告白しておかねばならない。苗字の文字のことである。長く「塚崎」と思っていて、本人に送るメールでもそのように書いていたのだが、「塚崎」は間違っていると言ってきたことがない。『在日

朝鮮人史研究』に載っている論文の筆者名は、「塚﨑」となっているので、そちらが正しいと気づいたのは、数年前のことだった。本人に謝ったことはないが、塚﨑なら「そんなん、かまへんですやん」と関西弁にべらんめえ口調が混じった言い方で許してくれるような気がする。

●光明池共同墓地に残る朝鮮人青年の墓石調査 ご報告

三宅美千子（和泉市における在日コリアンの歴史を考える会、ハンセン病問題を考えるネットワーク泉北、外島保養院の歴史をのこす会共同代表（市民として））

私は、和泉市における在日コリアンの歴史を1995 年から調べて来ましたが、「こんな資料あるよ」と塚﨑さんは、ずっと気にかけ協力していただきました。

彼は、若い頃に勤めた美木多高校（現成美高）に隣接する光明池に生徒を連れて須恵器のかけらを拾いに行かれたそうです。植民地下、300 人近い朝鮮人労働者が光明池築造工事で働きました。つるはしとトロッコによる工事は危険で事故による朝鮮人犠牲者の記事も見つけてくださいました。

昨年から、光明池共同墓地頂上の通路に残る朝鮮人青年（李聖祜）の墓石の遺族調査が進んで来ました。韓日の共同調査が始まり、昨年９月には東アジア平和歴史教育連帯の市民懇談会で大阪地域事例として韓恵仁先生が報告しました。今年になって中間報告に和泉市に来られました。年内に遺族との接触が見込まれる段階になりました。塚﨑さんに報告のメールをと考えていたところの訃報でした。

2003 年 8 月、第 24 回全国在日外国人教育研究大会が和泉市であり、光明池フイールドワークの案内をした時には猛暑の中、塚﨑さんは高さ 26 mの本堤防を登って駆けつけてくださいました。

『和泉市における在日コリアンの歴史（戦前編)』(2003）を市民で出した時には「農業するために日本に連行された朝鮮人「兵士」を投稿していただきました。平壌から和泉市信太山に 240 名の朝鮮人「兵士」が送り込まれ陸軍演習地での開墾・耕作にあたっていたことが判明したということでした。その後、20 年経っても何の手がかりもつかめないまま歳月が過ぎてしまいました。

私のもう１つのテーマ「大阪とハンセン病」問題にも資料を提供してくださり、おかげで『部落解放』(2013 年 9～12 月号）に「大阪とハンセン病ゆかりの地」連載もできました。

これから『和泉市における在日コリアンの歴史（続編)』にかかります。

急ぎすぎた塚﨑さん、見ていてください。頑張ります。ご冥福をお祈りいたします。

●塚﨑さんの思い出

石川亮太

塚﨑さんはお酒が入ると、時々ご自身の思い出を話してくださった。

高校教員になった塚﨑さんが配属されたのは、いわゆる「荒れた」学校だったという。塚﨑さんは「親鸞の気持ち」で単位を出すんだ、と言っていた。どういうことかというと、どんな生徒でも、一度でもやる気を見せてくれたら、それは学校を必要としてくれているということだから、単位を出すということだった。

塚﨑さんの目標は、とにかく生徒を卒業まで持っていく、ということだった。そのために夜遅くまで家庭訪問をし、生活指導を重ねて、生徒を学校に来させようとした。学歴社会を容認していると言われそうだけど、やっぱり中退したら、その後が大変だからね。あの子たちが生きていくためには、卒業させてやらなきゃならんのよ、と言っていた。

塚﨑さんの在日朝鮮人史研究を私が理解したとはとても言えないが、それでも感じるのは、在日の生活を守るために努力した人たちへの共感である。民族やイデオロギーの大切さを否定するわけではないが、それに背いたように見える人たちでも、差別と貧困の中で同胞の暮らしを守るため、必要と信じることをしたならば、理解しようとされていた。

そうした眼差しがどのように培われたのか、教員時代のお話を伺いながら分かったような気になっていた。その想像が当たっているか、いつか聞こうと思って、それきりになってしまった。成果の当否はそれとして検証しなければならないとしても、生身の塚﨑さんを少しでも知っている者としては、塚﨑さんがなぜそのように書いたのかも考えたい。

●父親として、教員としての姿―私の垣間見た塚﨑さん

川口祥子

塚﨑さんの在日朝鮮人史研究等の業績に関しては多くの方が触れられると思うので、私は自分の記憶の断片を記そうと思う。

池田市外教事務局の仕事をしていたころのことなので 1990 年代だと思う。市外教の研修として、大阪の在日朝鮮人に関するフィールドワークをお願いした。その時は枚方・交野方面だった。多くの資料を準備してご案内くださったのだが、二次会でポロっと漏らされた一言が今も忘れられない。「子どもたちと遊ぶ約束だったのだけど、今日も果たせなかった」と。学校の仕事がおありなのに、このような研修の依頼も多くて断りがたく、さぞお忙しいだろう。お子さんたちに申し訳ないなあ、と思った。

もう一つは二女の大田光さん(当時 27 歳)が出演した 2016 年のテレビ番組、「私が会いたかったあの子 沖縄戦学徒の面影をたどって」に関してである。大学で沖縄戦を卒論テーマとして以来、沖縄に移住して沖縄平和ネットワークに所属し、修学旅行生の平和学習ガイド等をしながら、沖縄戦で命を失った学徒たち一人一人の実像を調査し続けているとのことであった。番組では、旧制沖縄県立第一中学生のひとりの遺書(最初は名前もわからなかった)を手掛かりに、その少年の足跡を探して、生まれ故郷の小さな島を訪ね、写真も見つけることになる。皇国少年として郷里を守る覚悟を記した遺書なのに、後半にはもう一度父母兄弟に会いたいとの真情が吐露されている。そういう「あの子」に、光さんは、同じ若者として出会いたい、そして「戦争で死ぬ」ということを自分の問題としてわかりたいと迫っていく。柔らかな感性で歴史を探っていく優れた番組であった。ある友人は「第二の澤地久枝だ」と言った。塚﨑さんに感想をメールで送った。返信は残っていないが、謙遜されながらも、お嬢さんの仕事を誇らしく思い、温かく見守っておられる姿が感じられた。ご自分の仕事を理解し、志を受け継ぐ子どもがいるのはどんなに嬉しいことかと思った。

塚﨑さんと研究会などで接する機会が増えたのは、私が退職してハルモニ学生を始めた 2010 年前後である。二次会で、学校の仕事の多忙さを嘆いておられることもたまにあった。与えられた一人分の仕事だけではなく、生徒指導に関わるもっともしんどい仕事を背負っておられた。私の周囲には、本務以外のやりたいことがあると、校内ではなるべく楽な仕事にまわろうとする人がいた。ところが塚﨑さんという人は、ご自身の研究にもっと時間を割きたいであろうに、学校の仕事も決して手を抜かない、それどころか(進んでではなく、やむを得ずかもしれないが)しんどい仕事から決して逃げない人なのだなあと思った。

ある時、何かの会の後に、塚﨑さんの教え子だった女性と帰りの阪急電車で一緒になった。「塚﨑先生はすごい人。とても尊敬してます」と熱く

語る彼女の言葉を聞きながら、そうだろうなと、とても納得した。

塚﨑さんに最後にお会いしたのは７月８日、池田市民文化会館での「きむきがんひとり芝居　はらぺこ男の五度目の選択」公演の日だった。チケットの売れ行きが伸びて、最後の週には断らねばならなかった。会場に塚﨑さんの姿が見えたので「電話下さったらよかったのに」というと、「時間がとれるかどうかわからなかったから。急に時間ができたので」とのこと。待っていただいて最後に入っていただいた。実はあの芝居の中で「徴用」に関する用語で確信のもてない言葉があった。塚﨑さんにお会いした時、感想とともにお尋ねしようと思っていたのだけれど、もうその機会は永遠になくなってしまった。(2023.11.5)

●歴史家塚﨑昌之さん、在野研究者の矜持と意地
川瀬俊治（大阪空襲 75 年朝鮮人犠牲者追悼集会実行委員）

＜塚﨑さんとの最後の打ち上げ＞

８月２９日午後３時。大阪市北区西天満の空野弁護士事務所。

定例の大空朝（正式名・大阪空襲朝鮮人犠牲者追悼集会）の会議が始まり、半時間ほど遅れて塚﨑さんが現れた。いつも定時前に座り、関連する資料を配る方なので、本当に珍しいことだった。

いつも半ズボン姿だから、すぐ気がついた。両足が異様に腫れて、半ズボンがパンパンだった。声が掠れ気味で、やはり、いつもと違っていた。

この日は来年３月７日前後に開く大空朝の取り組みについて２時間ほど話し合い、終了後は近くの居酒屋に出かけた。総勢で５人。酒と興に乗り論談を交わすことが大好きだった塚﨑さんは、いつものように、一番奥の椅子に座った。

生ビールが運ばれて、みんなで、グラスをあげた。

２日後にオランダに調査に出かける一人が話の中心だった。

「それにしても、よう行くわ。直行便があんの？」

何もわからない私の発言だけが記憶に残っている。塚﨑さんは、オランダ行きの目的をよく知っていて、途切れ途切れだが、説明してくれた。

それにしても、塚﨑さんの体調は異常だった。

「１週間前より、いいよ。あの時は会議に来れず２次会に来るのがやっとだったから」

８月２２日に９・２２　関東大震災朝鮮人大虐殺シンポ（正式名・関東大震災朝鮮人大虐殺シンポジウム in 大阪―１００年続く思想と現実性を問う集会」）準備会議を開いたメンバーの一人が、私らを安心させるために、言葉を挟んだ。

話は、一気に塚﨑さんの体調のことに移った。

「塚﨑さん、原稿より健康でっせ。こんなにしんどいのに、来んでもええのに」。

塚﨑さんは、少し前屈みになりながら、いま執筆している論文について語り始めた。１０月に滋賀県立大学で開かれる朝鮮史学会の全体会で発表する原稿が「もう一息で完成する」と。在野の研究者の意地が、そこにあった。

「明日は必ず病院に行きや。必ずやで」。店を出て、別れた。

＜徹底した実証研究は余人を許さない＞

突然の訃報を知ったのは、それから２週間を過ぎてからだった。何が何だかわらわからなかった。大学時代は登山部で野山を飛び回り、強制連行の調査では、半ズボン姿で地下壕に潜った。強制連行に関わる近畿地方の地下壕はほとんど調査されたと思う。

体力派だから文献調査は疎かだというと、とんでもない。フィールドワークと緻密な文献調査を行った稀有の存在だった。

今年は衡平社創立 100 年に当たることもあり、水野直樹さんの編で『植民地朝鮮と衡平運動』（解放出版社）を出すことになり、私は「在日朝鮮人と衡平社」を調べることになった。

＜塚﨑さんの先行研究を上回るものを書こう＞

私は「京都学・歴彩館」（旧京都府立資料館）に２日間通って、まず塚﨑さんの論文で紹介した新聞の確認から入った。当たり前のことだが、引用文献は一字一句誤記などなく、資料館しか所属されていない『中外日報』、『京都日日新聞』、『京都日出新聞』など調べたが、新たな新聞記事は発見できなかった。塚﨑さんが調べあげてしまっていた。

＜塚﨑さんの原稿は完璧なんだ。見逃しがない。調査途中で発表などしない＞

10 年以上前からまとまった研究書を出すと聞いていた。塚﨑さんに「いつ出ますのか」と聞いても、「まだまだ」と、なかなか世に出ないことの意味がわかった。完璧主義者というか、一つの史料で見方が変わる怖さを知っていたからだ。

塚﨑さんの論文を乗り越えられないと考え、韓国の民族問題研究所が 2021 年に刊行した『在日朝鮮人團體事典　１８９５～１９４５』や、1920 年代の『東亜日報』などを手がかりにして、在日朝鮮人留学生の動向から衡平社の運動を追った。

＜遺された膨大な論文から何を学ぶか＞

塚﨑さんと知り合いになって何年経つだろうか。私は居住地奈良県の在日朝鮮人の歴史を、1990 年代初頭から奈良県立図書館所蔵の新聞を一つひとつ調べ終えたころ、塚﨑さんと大阪市中之島の大阪府立図書館で偶然出会った。1997、98 年のことだ。「私は大阪をやりますよ」と資料室に消えた。それから 40 年近く、膨大な新聞資料は言うまでもなく、関連行政資料などを悉皆調査した。『在日朝鮮人史研究』などで次々発表された論文を読んで、＜ようやる。とてもできん＞とつぶやくしかなかった。高校教師として３年間休職までして調べあげた。

昨年３月に塚﨑さんの著作と編集で『大阪空襲と朝鮮人　そして強制連行』（ハンマウル出版）を刊行した。塚﨑さんは書籍化することに乗り気でなかった。まだ研究がその段階ではないと思われたのか、あるいは、簡易な冊子でいいと判断されていたのかもしれない。しかし、私は塚﨑さんの原稿を読んで、「これはちゃんとした本にせんとあかん」と会議で申し上げた。結果、まとまった。本にするために研究するという志向とは無縁の人だった。

徹底した実証研究は、確たる裏付けもなく、自説を主張する「研究者」への批判が手厳しかった。最も怖しい人だったと思う。

今年 3 月 12 日の大空朝の集まりは、東大阪市の公共施設で開いた。追悼会のあと、劇団「タルオルム」の公演があった。舞台が引けてから、近くの朝鮮料理の店で交流会を開いた。宴も半ばのころ、塚﨑さんは、なぜ在日朝鮮人問題に取り組むようになったのか、その原点を話し始めた。気心知れた仲間の前だから語ろうとしたのだろう。その話しは５分間は続いただろうか。参加者は静まり返り、聞き入った。

いまは、塚﨑さんは遠くに逝ってしまったが、半世紀ほどかけて集めた史料（資料）と公刊された膨大な論文が、わたしたちを照らし出してくれている。（真相究明ネット事務局員、奈良・発掘する会）

●庶民の足跡をたどり、庶民の中で生きることを志向した人

太田　修

塚﨑さんに初めて出会ったのは、たしか 2002 年か 2003 年の朝鮮史研究会関西部会例会でだったと思う。高校教員を辞められてからは、おそらくどの幹事、会員よりも研究会に参加されていた。例会後の飲み会の二次会は、JR 中津駅のガード下の大衆酒場が塚﨑さんのお気に入りで、よく連れていってもらった。広々とした店内は、仕事帰りの労働者、会社員と思われる老若男女がにぎやかに語り合っていた。われわれもそんな中で飲み物

とあてを注文して話し始める。ビールをあおるように飲むのが塚﨑さんの飲み方だった。

塚﨑さんはフィールドワークのよき案内人でもあった。大学のゼミで5度ほどフィールドワークの案内をお願いした。「枚方の朝鮮人と戦争の傷跡をたどる」、「大阪城周辺における戦争遺跡と朝鮮人の足跡をたどる」、「日本最大の朝鮮人の町―鶴橋・猪飼野・コリアンタウンを歩く」、「島本の戦争遺跡と朝鮮人の足跡をたどる」、「戦前期吹田における在日朝鮮人の足跡と戦争の傷跡をたどる」。おもに1920年代からアジア太平洋戦争にかけての朝鮮人が労働していた現場を歩き、A3 判の写真や新聞・雑誌資料を巧みに張り付けたパネルを紙芝居のように見せながら、朝鮮人の労働や生活について語ってくださった。打ち上げにも毎回参加され、学生たちを励ましてくださった。そしてきまって「私が一番よう飲んだから」とお渡しした薄謝をほぼすべて飲み代として出してくださった。

私がかかわっていた「日韓会談文書・全面公開を求める会」の総会で講演をお願いしたことがある。会のニュースを見ると、2007年12月に開催された総会で、講演のテーマは「朝鮮人戦時強制動員の真相究明と資料公開－朝鮮人陸軍軍人を中心として－」だった。

講演の要点は、朝鮮人陸軍軍人・軍属問題についての日韓会談での議論には二つの大きな問題があったというものだった。その一つは、日本側が主張した軍人・軍属数が不正確なものだったという点である。その原因は、日本政府が「丁寧で精密な調査を行わなかった」ことに加えて、実態に近いデータを持ちながらも、「意図的に日本に不利なデータを隠し、事実とかけ離れたデータを作った」ことにもあるという。

もう一つは、数字だけの問題でなく、「戦時中の朝鮮人兵士たちの受けた苦痛、また生き残った兵士たちの戦後の苦悩、さらに戦死者や生きて帰ったとしても障害を持った兵士の家族たちの苦痛などが全く考慮に入れられていないことである」。そして、「両国政府は、朝鮮人兵士やその家族の個々の苦痛を洗い出す努力もせずに、政治的駆け引きの下で、一つにまとめて金額として解決を図った」と鋭く批判した。

塚﨑さんが最も言いたかったことは、国家が「朝鮮人兵士やその家族の個々の苦痛」を「一つにまとめて金額として解決を図った」ことであり、そうした個々の兵士や家族の思いをどう考えるのかということだったのである。

塚﨑さんは、歴史の中に庶民の足跡をたどり、実生活においても庶民の中で生きることを志向することを貫いた人だった。

●塚﨑昌之さんの早すぎる死を悼む

横山篤夫

2023年9月3日の15年戦争研究会で、塚﨑さんが「大阪における連合軍捕虜―空襲犠牲者3名を中心に―」を報告して帰途に就かれる前に、遅筆の私が 20 年ほどかけて書き溜めてやっと刊行できた『「英霊」の行方』・『銃後の戦後』（阿吽社）を手渡すことが出来た。これは私なりの塚﨑さんへの挑戦状のつもりであった。

精力的に研究発表を重ね、フィールドワークでは毎回部厚い資料集を作って生き生きと説明される姿が印象に残るが、著作物としては近く増補改訂版の出る『大阪空襲と朝鮮人そして強制連行』等はあるが塚﨑さんの調査・研究を全体としてまとめた著作は未だ刊行されていない。例えばこれまでの研究成果をまとめた「近代大阪と朝鮮人」といったスケールの大きな著作が刊行されれば、今後に続く人たちへのエールにもなるのではないか、と十数年先に生まれた者としての期待を述べたのが昨年の秋であった。

その時塚﨑さんは「そのことは考えていますが、もう少し先に総合的に互換性のあるものを考えて

います」といった風の答えがあって、彼のなかでは課題として意識されているのだと認識した。塚﨑さんのスケールには及ばないが、今回わたしなりに著作物にまとめたものを提示して、その見解を伺いたいと思った次第であった。

私の著書を受け取られた翌日から、検査・入院・手術そして急死されてしまったと聞いて言葉を失った。私の著作は 1 頁も見ることなく逝ってしまわれたのであろう。私の著作への塚﨑さんの見解を伺いたかった。議論したかった。とても残念である。

*

1991 年にピースおおさかが設立され小山仁示先生が研究会を立ち上げられた。そこの研究員という形で塚﨑さんと出会ったのは 1992 年ごろであった。当時共に大阪府立高校の社会科の教員であり、共通の問題意識をもって生徒と地域の研究会を組織して報告書を作成するなど共通項が多く、小山先生の研究会ではすぐに親しくなりご一緒することが多かった。小山先生の下で研究紀要を発行していたが、1993 年に私が「戦前の在阪朝鮮人の住宅問題と財団法人大阪啓明会」を発表すると、翌年塚﨑さんが「『本土決戦』準備と近畿地方―航空特攻作戦指揮と天皇の大和『同座』計画―」を発表されるというように小山先生のご指導を直接受けて以後次々に論考を発表された。

こうした経緯があったのでその後大きな舞台での塚﨑さんがご活躍の程は伺うにつけ、初めに書いたようなことを申し上げた次第であった。本当に早逝が惜しまれる。

●塚﨑さんの思い出

堀内　稔

「堀内さんが遅くなったので私のペースが目立つわ」。青丘文庫研究会終了後などの飲み会で、ビールをお代わりするペースである。歳をとったこともあって、ビール党を自認する私も、飲む量が少し減ってきた。これに対し塚﨑さんがよく言っていた言葉だ。それほどまでに酒豪だった塚﨑さん。最後に一緒に飲んだのは 7 月の例会の後だったろうか。あんなに元気だったのになんで？。

初めて会った時の記憶はない。ただ、ぼんやり覚えているのは、非常に若い塚﨑さんとどっかの喫茶店で会った記憶である。何を話したかはっきり覚えていないが、塚﨑さんが「朝鮮のことはまだよく分からない」と言っていたような記憶があるので、おそらく青丘文庫研究会に参加された初期の頃であると思われる。山岳部でバリバリやっているといったこともそこで聞いた記憶がある。

研究会でよく会うようになってちょっとびっくりしたのが、かなり寒くなっても彼は半袖しか着なかったことだ。思わず「寒くないの」と聞くと「ぜんぜん」とのこたえがかえってくる。さすが山岳部で鍛えた体だと感心した。聞くところによると、長袖のシャツを着るのは真冬の時だけだったそうだ。ただ最近は、やはり年齢の関係だろうか、長袖を着る期間が長くなってきたように思う。

青丘文庫研究会で発表者が見つからないときは、塚﨑さんか私におはちが回ってくる。塚﨑さんはよく 50 回くらい発表したと言っていたが、私もそれくらい発表しているだろうか。もう塚﨑さんの発表を聞けないのがさみしい。一緒に飲むことができないのがさみしい。

2005 年済州島フィールドワーク　by 堀内稔

●塚﨑昌之さんの仕事

竹内康人

塚﨑昌之さんが 2023 年 9 月に急逝された。67 歳だった。塚﨑さんは 1956 年に東京で生まれ、京都大学文学部で歴史を学び、大阪府立高校の教員となった。山田高校、茨木西高校、千里青雲高校などで社会科を教え、戦争遺跡など地域の歴史を調査して教材化した。2010 年に関西大学大学院の博士課程で単位を取得し、博士論文「在阪朝鮮人の定住化と生活に関する史的研究」で学位をとった。大学の講師になり、大阪大谷大学、関西大学、立命館大学などで講義した。

塚﨑さんは大阪の朝鮮人強制連行や戦争遺跡についての調査をおこなった。在日朝鮮人史研究会、朝鮮人史研究会、15 年戦争研究会などに属し、大阪での朝鮮人史に関する論文を『在日朝鮮人史研究』などに多数執筆した。市民を対象にした平和や人権に関する歴史のフィールドワークも熱心におこなった。強制連行・強制労働を考える全国交流集会、強制動員真相究明ネットワークでも活躍し、大阪の朝鮮人強制連行などについて調査をすすめた。朝鮮人軍人軍属の強制動員についても詳しかった。

塚﨑さんの大阪での朝鮮人強制連行についての調査は、『大阪空襲と朝鮮人そして強制連行』（2022 年、大阪空襲 75 年朝鮮人犠牲者追悼集会実行委員会)、「大阪への朝鮮人強制連行の概要とその特徴」(『朝鮮人強制連行調査の記録　大阪編・続』大阪府朝鮮人強制連行真相調査団 2018 年）にまとめられている。「大阪への朝鮮人強制連行の概要とその特徴」には労務・軍務での大阪への強制連行先の一覧も掲載されている。2023 年 6 月 23 日の同志社大学コリア文化研究会主催での塚﨑さんの講演レジュメ「大阪空襲と朝鮮人について」にはこの間の調査の概要が記されていた。講演を聞いて学ぶところが多かった。これらの著作は大阪での朝鮮人強制連行調査の指針となるものである。

塚﨑さんの警察史料に関する研究成果は『大阪府特高警察関係資料　昭和 20 年』（十五年戦争極秘資料集　補巻 41、不二出版 2011 年）として出版された。この史料は塚﨑さんが防衛省での史料調査で発見したものであり、大阪府警察局治安部特別高等警察第 1 課思想第 3 係による収集文書である。この文書には強制連行に関するものもあり、高槻地下工場に朝鮮人が 250 人、大阪製鋼に 500 人が強制連行されたことや新たな朝鮮人強制連行現場として大阪港石炭運送、大阪河川運送、高田アルミ、遠藤鉄鋼などが判明した。

歴史否定の動きにも敏感であり、いわゆる自由主義史観による強制連行否定論を批判し、2018 年の韓国大法院判決以後の日本政府の対応も批判した。塚﨑さんは 2019 年 9 月に「韓国はなぜ「徴用工」問題にこだわるのか？　大阪の朝鮮人強制連行から考える」の題で、大阪市クレオ大阪西で講演した。そこで強制連行否定の主張をまとめ、動員被害者の視点に立っての議論を展開した。その講演録画がＤＶＤとされ販売されている（新聞うずみ火発行、ウェブサイトから購入可)。

塚﨑さんは強制連行だけでなく大阪での朝鮮人の歴史全般を調べてきた。『在日朝鮮人史研究』に掲載された論文から主なものをあげれば、労働運動では「1922 年大阪朝鮮労働同盟会の設立とその活動の再検討」(36 号)、居住については、「戦前期大阪における朝鮮人住宅問題」(40)、教育では「1930 年代以降の在阪朝鮮人教育　内鮮「融和」教育から「皇民化」教育へ」(44)、済州島との関係については「大阪-済州島航路の経営と済州島民族資本」(39)、朝鮮人統制については、「柳原吉兵衛所蔵史料に見る「大阪府内鮮協和会」」(47)、空襲については「大阪空襲と朝鮮人戦中、そして戦後」(51）などがある。また軍務での朝鮮人動員については、「朝鮮人徴兵制度の実態　武器を与えられなかった「兵士」たち」（34）で農耕勤務隊や地下施設隊などへの動員と研究課題を提示した。

『在日朝鮮人史研究』誌以外にも、「水平社・

衡平社との交流を進めた在阪朝鮮人―アナ系の人々の活動を中心に」(『水平社博物館研究紀要』9、2007 年)、「戦前・戦中期、大阪における朝鮮人宗教政策の変化と朝鮮人の対応―「朝鮮寺」と神社参拝政策を中心にして」(『東アジア研究』57, 大阪経済法科大学アジア研究所 2012 年)、「明治期以降、河内・摂津における「楠公遺蹟」の「発見」と「創造」「臣民」教育・地域振興・観光」(『教育研究』46 大阪大谷大学教育学会、2020 年)などの論考を記している。地域での楠木正成賛美に憤慨していた。

塚﨑さんは済州島についての調査も行った。その報告は「「本土決戦」体制と朝鮮半島南部・済州島」(『帝国支配の最前線　植民地』吉川弘文館 2015 年）としてまとめられている。また防衛省での史料調査から兵庫での中国人動員について「戦時中の大日電線尼崎工場の中国人労働者について」(『歴史と神戸』239 号、2003 年）で、外務省報告書にはない動員実態を明らかにし、「アジア太平洋戦争中、日本船で死亡した中国人船員について」(同 245 号、2004 年）では中国人船員の労働実態について言及した。さらに戦時の豊中での帝国鋳鋼所での中国人少年工の存在も指摘した。

塚﨑さんは大阪での戦争遺跡の調査もおこなった。「「本土決戦」準備と近畿地方　航空特攻作戦指揮と天皇の大和「動座」計画」(『戦争と平和 04』大阪国際平和研究所紀要 13 号、2004 年)、「伊丹飛行場の成立の背景と戦時期の軍用飛行場の実態」(『地域研究いたみ』39、2010 年）などの論文がある。居住地である吹田市での調査は『吹田の戦争遺跡をめぐる』(2020 年、世代をこえて考える戦争と平和展実行委員会）の形で出版された。

このように塚﨑さんは在日朝鮮人史研究、強制連行研究、戦争遺跡研究で多くの仕事をした。これまでの研究成果が形をなすときに亡くなられ、残念でならない。塚﨑さんは 1990 年代の全国交流会で面識を持った。この交流会で強制連行の調査方向、現状批判をリードするひとりだった。収集した朝鮮人関係の名簿類を快く提供し、資料の問い合わせにも答えてくださった。大阪では崇禅寺の空襲追悼碑を案内していただいた。論文の抜き刷りも手元にある。2023 年 7 月に富山の黒部ダムフィールドワークでお会いし、大阪のメンバー 3 人と私とで会食した際、酷使で片目がほとんど見えない、足もむくむ、静岡でぜひフィールドワークを、みな、いつ死ぬかわからないからと話していた。それが最後となった。私と同年齢である塚﨑さんの仕事に敬意を示し、ここにその仕事をまとめることで、別れの言葉としたい。

（2023/10/15、強制動員真相究明ネットワークニュース 23 号（2023.11.12）に掲載）

●残念です、色々ありがとう

徐根植（兵庫朝鮮関係研究会）

私の撮った塚﨑さんの映っている写真を見ると強制動員真相究明ネットワーク関連で 2005 年結成集会から富山のＦＷまである。かれこれ 18 年を越える付き合いか。

強制動員ネットが結成された 2005 年に私は「尼東トンポ歴史講座」を企画した。３回の講座で２回目の講師が塚﨑昌之さんだった。そのころ歴史修正主義が台頭し朝鮮人強制連行を否定する動きがあった。この間違った動きを正しく理解するためて塚﨑さんにお願いした。集まった同胞に塚﨑さんはＢ５版１５頁の参考資料を準備してくれ丁寧に教えてくださった。終わってＪＲ尼崎駅前の焼き肉店でビールを飲みながら楽しく過ごしたのを思い出します。

チャンイン（妻の父）は学徒動員され皇居前の行進に参加し２箇所の軍事施設で訓練を受けたのち海軍の基地に配置された。その場所について聞いたところ施設の名前の間違いなどについて防衛省の旧日本軍資料を調べて教えてもらった。本当にお世話になりました。

急死に胸が痛みます。もっと教えていただきたかった。

（写真：今年３月の強制動員真相究明ネットワーク篠山ＦＷの懇親会で　by 徐根植）

●「冬のＴシャツ姿」

中田光信（強制動員真相究明ネットワーク事務局長）

こよなく愛したお酒
冬のＴシャツ姿
数々のフィールドワーク
在日朝鮮人研究への情熱
今も走馬灯のようにめぐっています
合掌

●あなたは私よりずっと若いけれど、ずっと尊敬する大好きな恩師でした

橋本　徹（高槻「タチソ」戦跡保存の会）

「今日、福岡から来阪中のＡさんにタチソの資料を渡す約束をしていたが、心臓弁膜症の疑いで緊急入院したので私の代わりに資料を渡してほしい。」とあなたからの電話を受けたのが９月６日午前１１時でしたね。私はあわてて資料をかき集めて午後に高槻でＡさんに会って資料を渡しました。そのわずか１０日後にこのようにあなたと永遠のお別れをすることになろうとはそのとき思いもしていませんでした。通夜・告別式であなたにお別れを告げたにもかかわらず、あなたがこの世からいなくなられたことを今でも信じることができません。こんなに早く逝くとはあなたご自身も信じられなかったでしょう。いま、私は途方に暮れています。

私たち高槻「タチソ」戦跡保存の会が活動できているのは、ひとえにあなたの地道な調査と研究の膨大な果実があったからこそなのです。これまで十数回、当会主催で行なってきたフィールドワークにおいても、資料制作から当日のガイドまでその全てがあなたのご好意に甘えてきたものでした。いくら感謝しても感謝しきれません。

私は 1940 年、名古屋市生まれの 83 歳。1945 年春、私が５歳の時に大阪府三島郡山田村（現吹田市山田）の親戚を頼って一家６人が縁故疎開。1967 年結婚してそこを離れるまでの 22 年間を私はこの山田村で暮らしました。東西を山に挟まれた南北に細長い村の真ん中を南北に走る街道に敗戦後間もなくやってきたのは進駐軍のジープ。「アイム ベリーハングリー。ギブミー チョコレート！」と叫びながら追っかけていた私がその後その街道で見聞きしたこと、例えば、松葉杖をつきながらカンパ箱を胸からぶらさげて街道を北から下ってきた傷痍軍人は村の北にあった福祉施設・弘済院に収容された人たちであろうこと、その弘済院が戦前・戦中・戦後どのような働きをしたのか。そして小学校６年生の時に目撃した街道を北から南に行進する団体が吹田事件のデモ隊であったことをのちに教えてくれたのはあなたでした。

その他、小学校のイベントの一つとしてウサギ狩りをしていた山がのちに大阪万博の会場になったのですが、あなたはその地下に眠る海軍山田地下弾薬庫を発見し、私たちの「兎追いしかの山」の下は弾薬庫であったことも、あなたが教えてくれたのでした。戦後私の父親を雇ってくれた会社が戦前・戦中どのような働きをしたのかをも教えてくれたのはあなたでした。

私よりずっと若いあなたですが、タチソに関し

てだけではなく、私の人生そのものの大先輩、いや尊敬する大恩師、「過去に目を閉ざすものは現在にも盲目になる」を常に想起させる恩師でした。

ピークハンターではないあなたが好きだった京都の北山、私も好きで若い時にはよく単独行をしていたのですが、あなたがそれなりに歳を重ね暇になられたらぜひ一緒に北山を歩きまわりたいと、ずうっと思っていたのですよ。

●追悼・塚﨑さんとの思い出

下嶌義輔

早い、あまりにも早すぎる！！まだ、やりたい調査や研究が多くあったに違いなかったと思う。

私と塚﨑さんが特に親しくなったのはロシアへ旅行してからでしょうか。それ以前は、1990 年から始まる「朝鮮人・中国人の強制連行・強制労働を考える全国交流集会」（以下、全国交流集会）で塚﨑さんを見かけて、集会での報告を聞いたりしてすごい活動をしている人だなと思っていました。

1995 年には高槻で塚﨑さんが中心となって全国交流集会が開かれ、次は岐阜であったのですが、岐阜にはそういった運動する組織がまったく無く、一から作っていかなければなりませんでした。その岐阜の全国交流集会のメンバーの一人に辻田さんという日本軍の軍服を研究している人がいて、NHK の満州もののドキュメンタリー番組のエンドロールにはほとんど名前が出ている人です。その辻田さんが中国東北部黒竜江省中・ロ国境の虎林市にある虎頭要塞のウスリー川対岸のイマンの町の虎頭要塞にあった４１センチ榴弾砲の被害状況を調査に行きました。（中ソの国境紛争のあったあたりです）

まず、ウラジオストクでは要塞のそばまで行って、はじめて使われている要塞というものを見ました。虎頭要塞は戦後中国に使われるのを恐れたソ連軍によってほとんどの施設は破壊されていましたし、日本の要塞も砲台は外され台座が残っているだけです。泊りのホテルでは同じ部屋になり、運動の話はお互い気づまりなのかほとんどせず、山の話ばかりをしてました。当時の私は４０を過ぎ椎間板ヘルニアの手術をして、そのリハビリに若いころ少しやっていた登山を再開して北アルプスなどへ出かけていたのでした。

この旅行最大の事件がイマンの町で起きたのです。前日イマンの町へ着いてシベリア鉄道の迂回線まで行けるように交渉していたのですが、ロシアの軍事基地がそばにありそれは実現できませんでした。そこで、男４人で翌朝早く起きていけるところまで歩いて行こうとゆう話になったのです。朝６時ごろホテルを出て３０分ほど歩いてウスリー川に近づいたところで警察官らしき人に止められ警察署へ連れていかれ一室へ軟禁されました。

当然、コミュニケーションはまったくできず、なぜ、軟禁されたのかわわからず４人で雑談をしていました。後に通訳の人に聞いたところ、鉄道や川（国境のことか？）に近づいてはならないとのことでした。あの、軟禁された部屋に塚﨑さんが書いた「スターリン万歳」の落書きはどうなっているでしょうか・・・

最後に塚﨑さんと会った黒部でも山の話をしましたね。学生時代に登った剱岳の話を懐かしそうに話してました。こう見ると、塚﨑さんとは会うと山の話ばかりしていたようです。私は塚﨑さんに「安らかにお眠りください」とは言わない。

この地の鬼になりこの国の歴史を捻じ曲げようとする奴らが塚﨑さんの名前を聞くと逃げ出す鬼になってほしい。

●塚﨑さん、さようなら

遠藤　努

塚﨑さんとは昨年（2022 年８月）の佐渡鉱山フ

ィールドワークの際にたまたま同じ宿であったことから、大阪からの参加者と一緒に夕食をともにし、飲みながらいろいろなことを楽しく議論させていただきました。強制連行のことからかつての学生運動の話まで・・・。

今年の宇都宮での強制動員の全国研究集会の登壇者に塚﨑さんのお名前が挙がっていたので、再会することを非常に楽しみにしていたところでした。

短いつきあいでしたが、お人柄には触れることができたと思います。

それにしても大事な同志を失い、心に空白ができてしまいました。今は塚﨑さんのこれまでの素晴らしい業績を辿り、後に続きたいと考えています。

●追悼、塚﨑昌之さん・・・大切な仲間を失う！
櫻井秀一（大阪中国人強制連行受難者追悼実行委員会）

2023 年 9 月 16 日塚﨑昌之さんが突然逝去される 2 週間前の 9 月 3 日、15 年戦争研究会第 267 回において、塚﨑さんは「大阪における連合軍捕虜―空襲犠牲者 3 名を中心に―」を発表しました。隣に座り横を見ると、塚﨑さんの足がパンパンに腫れていました。「何時からそうなってん」と聞くと「1 週間前から。その前から前兆はあったけど・・・。明日精密検査に行く」と言っていました。それは彼の自己認識であり、実際の体調とはかけ離れていた認識であったことが悔やまれます。4 日、即入院となり 16 日に至ってしまいました。

私は日中戦争下の中国人強制連行のことを調べてきましたが、塚﨑さんは朝鮮人強制連行だけでなく、もっと広く日本の侵略下の朝鮮、戦時下の在日朝鮮人の生活史までを対象として、膨大な資料を集め整理し発信することを長年積み重ねて来ました。

何故かはよく分からないところが多いのですが、中国人強制連行問題に関わっている者と、朝鮮人強制連行に関わっている者との交流が少なく、幾つかの試みが 30 年ほど前からあり、また小さなぶつかりもありました。そうした中、それぞれの視点の大事さと相互の共有が大切であるという視点を強く持っていたのは塚﨑さんだと思います。私は心より彼に共感し、その視点を大切にする努力をしてきました。

出会いは 1997 年の 15 年戦争研究会であり、その後「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国集会」（既に集会名の記憶が曖昧に）でも会っていると思いますし、研究会と様々なフィールドワークでも一緒しました。

塚﨑さんの視点の特徴は被害者に根ざし、地域（社会）の生活に根ざすだったように思います。ともすれば、朝鮮人問題や中国人問題は政治問題に直結します。日本の侵略思想の戦後の継続と被害国の民族意識とのぶつかりは必然的に避けられません。その中で、具体的なそれぞれの地域の現場から、被害事実を明らかにし、矛盾と課題を浮かび上がらせ、その中から東アジアの民衆が共に生きる道を探し続ける努力を、塚﨑さんは積み重ねていたのではないでしょうか。

●塚﨑塾の思い出
亘　佐和子（毎日放送記者）

「塚﨑さんの話を私ひとりで聞くのはもったいない」と取材のたびに思っていて、2022 年 10 月、「塚﨑塾」という記者の勉強会を立ち上げた。大阪のメディアにとって、在日コリアンの歴史を知ることはとても重要だ。東京では見えないものが見えてくるはずだ。記者が所属組織の壁を越えてつながることで、いまの政治の流れに立ち向かいたいという気持ちもあった。

「勉強会は何回シリーズでやりますか」と塚﨑

さんに聞かれ、とっさに「2か月に1回のペースで最低2年は続けたい。フィールドワークや映画鑑賞など楽しい企画も入れながら」と答えた。私はいつも仲間に呼びかけるだけで、講義の中身は塚﨑さん任せ。なんとも無責任な主催者だったが、塚﨑さんはいつも膨大な資料を用意して臨んでくださった。「飲み会をタダにしてくれたらそれでいい」と謝礼も受け取ってくださらず、いつも申し訳なく思っていた。これまでの塚﨑塾のテーマは以下のとおり。

- 第1回　2022年10月12日　自己紹介・在日朝鮮人史と軍事史
- 第2回　2022年12月7日　ケシ栽培とこま犬から考える侵略戦争
- 第3回　2023年2月2日　崇禅寺の戦災犠牲者慰霊塔に朝鮮人犠牲者が記された意味とその後の被差別地域との関係の深化
- 第4回　2023年4月15日　大阪城フィールドワーク
- 第5回　2023年6月7日　大阪の防空飛行場伊丹飛行場と大正飛行場はどのようにつくられ、どのように機能したのか
- 第6回　2023年8月9日　大空襲時の朝鮮人監視体制

並べてみると、あらためて幅広い内容だなと思う。4月15日の大阪城フィールドワークは特に印象深い。雨の降る中、一日かけて大阪城周辺の戦跡を巡るぜいたくなツアーだった。「こんなフィールドワーク、塚﨑さんにしかできないですね」と言ったら、「やってみる？」と笑っておられた。第7回は11月11日、禁野火薬庫跡など枚方のフィールドワークの予定だった。「2年間は続けたい」と思っていた塚﨑塾が1年で終わりを迎えたことは残念でならない。10月29日に放送したドキュメンタリー「映像'23　流言飛語百年」は塚﨑さんの論文がきっかけで企画した番組で、塚﨑さんの現地解説シーンから始まっている。亡くなったことが今も信じられない。飲み代は私が払うから、たまには下りてきてフィールドワークをしてくださらないかなと思う。

●塚崎雅之さんと一緒に行った地下壕のフィールドワークの記憶

韓程善（高麗大学国際学部教授）

私が塚崎さんと知り合ってから過ごしたのは10年足らずだ。きっかけは日本列島に散在している戦争遺跡地下壕だ。私は2015年京都大学人文科学研究所で国際交流基金フェローとして研究している時に初めて彼に会った。当時、私は日本の市民社会で行われていた戦争遺跡の保存運動について研究していた。2011年、松代大本営地下壕の保存運動を追跡することで始まった研究だ。以後、全国各地の地下壕保存運動を調査しはじめ、それが自然に塚崎さんとの出会いにつながった。おそらく、ある朝鮮史研究会の集会で初めて会ったと記憶している。そして私の研究は、新しい転機を迎えた。

京都に滞在しながら彼の助けと案内で、大阪、高月、神戸、香芝、宇部、可児などにある地下壕、またはその他の戦争遺跡地をフィールドワークすることができた。暗闇の中の地下壕で、私のいろいろな質問に対して説明してくれた彼の凛とした声を覚えている。彼との現地フィールドワークは、常にその地域での地下壕について記録と案内、そして保存運動をする活動家との貴重な出会いにつながった。私は彼らと交流しながら、日本人の生活の中で、地域で展開される具体的な戦争遺跡保

存の努力に接することができた。

とくに思い出に残るのは、一緒に行った高槻のタチソ、香芝の屯鶴峯、そして可児の久々利地下壕のフィールドワークだ。タチソのフィールドワークは、高槻「タチソ」戦跡保存会の事務局長である橋本徹氏が直接案内をしてくれた。早春、肌寒い空気を吸いながら山の中を歩き、森の中で何の標識もなく放置された、ほぼ崩れおちた入り口を探した。塚崎さんは、全国に散らばっている地下壕をフィールドワークしながら得た経験から、地下号のフィールドワークのこつも教えてくれた。夏になる前、森林が茂る前にフィールドワークをしなければならないという。そうすれば、山中に放置された地下壕の入り口を、比較的容易に見つけることができるという。崩れた入り口から這って入り、暗闇の中で懐中電灯を点灯したとき、私は巨大な地下壕の中にいることに気がついた。タチソはそのように私に実体を教えてくれた。香芝の屯鶴峯にある地下壕は、「屯鶴峯地下壕を考える会」の会員である田中正志氏が案内をしてくれた。タチソと比較すると比較的に状態が良かったし、フィールドワークも安全だったと記憶している。屯鶴峯地下壕に関する記録、資料、そして研究に関する情報も得た。塚崎さんは彼が苦労して収集した資料も気安くわけてくれた。可児の久々利は、2017 年に塚崎さんの助けを借りてフィールドワークしたもう一つの地下壕だ。この時は下嶌義輔さんに案内してもらった。特異な復層になった巨大な地下壕だった。 もちろん、フィールドワークはいつも酒の席へとつながり、酒の席で私はより多くの情報や話を聞くことができた。

塚崎さんと一緒にフィールドワークしたところは、すべて放置されている地下壕だった。だからといって忘れられた場所ではない。地域の草の根活動家が、他の地域の戦争遺跡保存活動家と情報を共有しながら、地下構造物を記録し、関連資料を発掘し、記憶の場所を錬磨しているところだ。多くの場合、地下壕は戦時期に日本人はもちろん、植民地の朝鮮人を（強制）動員して造った構造物で、私たちには暗い遺産として伝承された所だ。記憶したくない暗い遺産なので、地下構造物は地元の人や専門家の案内がなければ、私のようなよそ者には探しにくいところに眠っている。塚崎さんと彼の仲間たちのおかげで、ほとんど誰も探さない地下壕、漆黒の暗闇の中で、私は韓国と日本の間にある暗い歴史の一つの断面を体験することができたのだった。

貴重な体験だった。消えていく歴史の痕跡、特に名もなく消えていくこれらを記憶し、記録しようとする彼の情熱とひたむきさは、ある英国詩人の詩の詩を思い出させます。(堀内稔訳)

Do not go gentle into that good night,
Old age should burn and rave at close of day;
Rage, rage against the dying of the light.” (Dylan Thomas)

あの快い夜のなかへおとなしく流されてはいけない
老齢は日暮れに　燃えさかり荒れ狂うべきだ
死に絶えゆく光に向かって　憤怒せよ　憤怒せよ
（ディラン・トマス　鈴木洋美　訳）

●大阪空襲「空白」の歴史　塚崎昌之さんが作成した朝鮮人空襲犠牲者名簿と冊子
文箭祥人（大阪空襲 75 年朝鮮人犠牲者追悼集会実行委員）

＜ほとんどが「創氏改名」による名前であり、本名と思われるのは 22 名程度である＞

塚﨑さんが著作・編集した『大阪空襲と朝鮮人そして強制連行』にこう記されている。大阪空襲朝鮮人犠牲者数は明確になっておらず、関連する統計から 1,230 人と推定され、そのうち、169 人の名前がわかっている。そのうち本名と思われるのはわずかである。

犠牲者の名前が書かれている 6 つの名簿を塚﨑さんが調べ、朝鮮人 169 人の名前が大阪空襲 75 年朝鮮人犠牲者追悼集会実行委員会が作成する犠牲者名簿に登載された。

＜そのうちで年齢が判明する人が 142 名いるが、数え年 10 歳以下の子どもが 52 名、37.1%を占め、子どもが多く犠牲になったことがわかる。貧困層が多く、子どもも多かった朝鮮人には、徴収される集団疎開の費用などが用意できない家庭も多かった。大阪に止まらざるを得ない児童が多く、被害を大きくしたと思われる。こどもが疎開先で差別され、いじめられるのを恐れて疎開させなかった親もいたという＞

＜さらにわからないのが、朝鮮人強制連行者の空襲犠牲者数である。強制連行空襲犠牲者は 100 人以上とも推測できる。そのうち、空襲で亡くなった強制連行者は日本製鉄大阪工場の 2 名がわかるのみである＞

大阪空襲の記録・記憶の継承において、朝鮮人の犠牲や被害は空白であった。塚﨑さんはそれを埋めようと尽力された。

追悼にあたり、この冊子を再読した。記述は戦後にも触れている。

＜闇市では「第三国人」と蔑称で呼ばれた朝鮮人・台湾出身者が横暴を極めたように言われるが、朝鮮人が占有できた場所は、条件の悪いごく一部の場所に過ぎなかった＞

＜戦後、大手建設会社は朝鮮人、中国人の強制連行者らを使用して、戦後の「休業手当」等で損益が出たとして、補填を日本政府に迫り、4600 万円を手に入れた。実際には「休業手当」等が朝鮮人、中国人に手渡されることはほとんどなかった＞

＜日韓基本条約の無償・有償資金を投入した浦項製鉄所の建設は日本製鉄など日本企業が受注した。2015 年、日本外務省は日本の援助がアジアの繁栄に「貢献」しているとする映像を公開したが、浦項製鉄所の建設などが例示されている＞

塚﨑さんは、戦争は終わったが、数々の問題が残っていると伝えたかったのだろう。だから、塚﨑さんは次世代の若い人に話をし、メディア人と交流してきたのだと思う。来年も大阪空襲朝鮮人追悼集会を行います。さらに大阪空襲の記録・記憶の空白を埋めるよう活動を続けます。そして、この冊子を読み続けようと思います。

●組合の反主流派の活動、そして地元パネル展の親切なボランティア監修者などいっぱいの活動

三上弘志

塚﨑さんとの出会いは、組合関係でだったと思います。以前は府高教、分裂後は大阪高教組(日教組)の活動の中、彼も僕も職場(分会)が大阪の北摂地域にあったので、小さな集会を一緒にやったり、ビラを受け取ったり届けたりというような活動でした。府高教内では反主流派同士の連帯感(私達は圧倒的少数派だったので)みたいなものがありました。考え方やスタンスもあまり知ることもなく、彼がボルダリング好き、どこへでもシャツ一枚で駆けぬける人という印象だけがありました。お連れ合いが朝日新聞読者ニュースの編集をされているとかも何故か知っていました。

その頃は、彼が在日韓国朝鮮人に関する研究に造詣が深い人だと知ることもなかったのですが、組合活動の知人の中で、塚﨑君のその領域での活躍を耳にするようになっていきます。特に大阪高教組委員長であった故富井恭二君が 15 年戦争研究会に関わり、その関係で塚﨑君の案内で陸軍真田山墓地へフィールドワークに行ったりしたこと

を思い出します。

2015年「子どもたちと考える戦争と平和展in高槻・島本」を始めると、貴重なアドバイザー、監修者になってくれました。このパネル展の発端が従軍慰安婦報道問題(吉田清治絡み)で朝日新聞謝罪事件をきっかけにネトウヨがヘイト的展示をし、それへの抗議活動だったので、展示会場にネトウヨが押し掛ける心配がありました。展示内容にミスがあれば付け込まれることは避けたいという思いがあり、塚﨑君に最終チェックをお願いしたのが出発で、以降毎回のように駆けつけてくれ(今夏も)、賛同金もきちんと渡してくれていたのです。

島本地域で戦跡の資料が乏しかったりすると、必死で探索してくれ、その資料をもとに現地案内もしてくれました。

高校教員としての最終盤でも、学年主任(任命制でなく職場で公選)として、少し体を壊すほど奮闘していたと聞いたこともありました。

そのフットワークの良さ、蓄積された学識をもとに色々な研究に取り組み、その情報を共有、気軽に発信するスタイル。活躍して貰えるのはこれからだと期待していただけに、早逝は残念でなりません。

●「牧さん、行くでしょ！」

川口　牧（茨木市在住）

塚﨑さんの葬儀の際に「川口さんは塚﨑さんとはどんな知り合い？」と聞かれ、思わず飲み友だちかなぁ、などと返事をした記憶があります。

私が塚﨑さんと会ったのは、ピースあい(「茨木市安威地区に戦争と平和を学ぶ公園を」市民の会)が最初でした。

茨木市安威地区には戦時中、日本海軍が本土決戦備え、衣料・食料を備蓄するための地下トンネルが造られその建設に当たったのが強制連行された朝鮮人でした。当時、強制労働させられた生き証人の方から、ていねいな聞き取り調査などもして来たのでした。

その中心にいたのが彼で、私が市外教や三島外教の事務局を担っていた頃には、彼にフィールドワークをお願いして来ました。

私自身は、茨木市にあった『西日本入管センターを考える会』の一員として、面会活動や非正規滞在の人たちの支援などに関わって来ていて、場面は違ってもお互いにそれぞれの場で取り組んできていました。

勿論、取り組んで来た年月やその深さにおいても彼の活動は私などとは比べ物にならない位でした。

ただ、彼のフィールドワークや彼が講演した後などは、必ず飲み会が設定されて、「牧さん、勿論行くでしょ！」といつもグラスをグイっと口元で傾けるしぐさをしながら、茨木市内の時は、私もほぼ毎回付き合って来ました。

何しろ彼はどこにでも走って行く人なので、終電など関係なく夜中の1時2時まで平気で飲んで歌っていたのでした。

幸い、飲み会は茨木市内が多かったので、私は15分や20分以内には帰宅できましたが、彼は2時、3時、あるいはそれより遅くに帰宅していた事も多かったのだと思います。

もう彼の「牧さん、行くでしょ！」という声が聞けなくなってしまいましたが、彼の歩んできた足跡はきっと多くの人たちが引き継いでくれるだろうと確信しています。

●資料提供・助言に心より感謝申し上げます。

相可文代

2016年に梅田和子さんから、旧制茨木高等女学校（現大阪府立春日丘高校）で、特攻兵に与える覚醒剤入りチョコレートを包む勤労奉仕をして

いたという戦争体験を伺いました。自分が教え子を送り出していた高校でそんなことが行われていたことに驚愕し、調べ始めましたが、なかなか資料が見つかりませんでした。そんな時、塚﨑昌之さんから書籍を紹介していただき、助言も受けることができました。おかげさまで 2021 年には自費出版でしたが、冊子にまとめることができました。さらに、今年の 10 月には加筆して『ヒロポンと特攻　太平洋戦争の日本軍』を上梓することができました。しかし、残念ながら塚﨑さんには読んでいただくことができませんでした。

塚﨑さんは本当に誠実で親切な方でした。梅田和子さんの戦争体験に関連して、「タチソ」についての証言映像にもご協力いただきました。もはや完成作品を見ていただくことはできませんが、私たちは元気な塚﨑さんの姿を見ることができます。来年の末には完成させる予定ですので待っていてください。

2023 年 11 月 9 日

●塚﨑氏の無念

中河由希夫

今年の初夏のころだったと思う。調べもののために天満橋のエル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）に行った。そこで館長の谷合佳代子氏と雑談をした時、知人たちのうわさ話になった。「塚﨑昌之さんは酒豪で、ジムで体も鍛えて 40 代の肉体だと思う」と私が言うと、谷合氏は「いやそうではない。彼も酒が弱くなって、酔っ払って路上で寝ていたこともあるそうだ」と言っていた。その時は、軽く聞き流していた。今回の訃報に対し、谷合氏に電話で詳細を尋ねたが、周囲の者が見かねて通院させたら、即入院。1 週間か 10 日で亡くなったと聞いた。

塚﨑昌之さんは大学時代からの友人である。彼は、山登り・崖登りのサークル（山歩会か？）にいて、頑強な体をしていた。酒もよく飲み、某セクトが彼のオルグに際し、一升瓶をさげてやってきたといううわさも聞いた。彼は教育実習で大田季子さんと知り合い、結婚しようとした。しかし太田さんの父親から、所帯を持つのに無職ではだめだということから、高校教員となった。初任は堺市にある美木多（現、成美）高校。私と同じく彼も南海ホークスのファンで、今はなき大阪球場にも通っていた。

1990 年代、私は高校や中学の教員仲間と泉州の朝鮮人強制連行の記録を残す活動をはじめたが、大阪全体では朝鮮人強制連行真相調査団がつくられた。塚﨑氏も交野市私市（きさいち）地下トンネル群（大阪陸軍造兵廠地下疎開工場）の調査等の中で真相調査団に参加した。そして『朝鮮人強制連行調査の記録〈大阪編〉』が 1993 年 4 月に出版された。この時期は 1995 年が戦後 50 年であり、戦争責任、戦後責任を追及する動きは今とは考えられぬ程鋭い時期であった。塚﨑氏は北摂、大阪全体の朝鮮人の地域史、社会運動史の調査を行い、戦争遺跡の発掘を行った。1995 年 7 月第 6 回「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会」が高槻市で開催されたが、現地の中心メンバーは塚﨑氏だったと記憶している。彼は体力を生かしあちこちのフィールドワークに参加し、その説明役を数多く行った。そのせいか、彼の持つ『朝鮮人強制連行調査の記録〈大阪編〉』はボロボロだったのを記憶している。彼は体力、知力を武器にあちこちを走り回り、韓国済州島まで調査におもむいた。

最後に。あの頑強な塚﨑氏が 67 歳でなくなるとは思ってもみなかった。彼は「大阪空襲 75 年朝鮮人犠牲者追悼集会実行委員会」を精力的に運営するなど、ますます活動に身を入れていた。あっけない彼の死に対し、「まだまだやることがあったのだが・・・」という彼自身の無念の声を聴く気がする。

●追悼、塚﨑さん―阪大生に教えてくださった、身近な空間から考える戦争の歴史
北原　恵（元大阪大学教員）

塚﨑さんとは、それほど深い付き合いがあったわけではない。私が大阪大学（文・日本学講座）で担当する授業に、ゲストスピーカーとしてお招きしたり、フィールドワークに学生たちを連れて行ってもらったことが数回あるくらいである。それでも、思い出が溢れるようにでてくる。

6 年前（2017 年 7 月）、私は「大阪大学の戦中・占領期」をテーマに、学生たちが調査・発表をする学部ゼミを行っていた。身近なところから戦争について考え、自分の視点で探求してほしいと思ったからだ。当時、ゼミ生たちは、占領期の大阪大学（特に伊丹エアベースと阪大・地域）について、自主的にプロジェクトを作って研究していた。そこで塚﨑さんに、戦前期の大阪がどういう町・軍都であったのかを中心に、大阪帝国大学がどう関係したか、という話をお願いした。それをご縁に、塚﨑さんには個別に助言をいただく学生もでてきた。

2019 年に「戦争と視覚表象」の講義にお招きした時は、「東アジアの歴史に中に見る近代軍都大阪と大阪帝国大学」というタイトルでお話をしていただいた。授業は、現在の USJ などのレジャー施設が戦前、どういう場所だったのかという問いかけから始まった。留学生も含む受講生たちは、塚﨑さんの魅力にすっかり魅せられて、自主的に何度かフィールドワークを企画することになった。若い学生のためなら、と労を惜しまず、2019 年の真夏に大阪城公園をまわってくださったのも、そのひとつである。

このような付き合いだったので、私は塚﨑さんの私生活についてはほとんど知らなかった。葬儀の日、戸籍制度と天皇制に反対して夫婦別姓を貫かれたことを私は、初めて知った。葬儀場のスタッフが読み上げた塚﨑さんの生き方は、その厳かで常識的な口調とは真逆の、心を打つものだった。――え？　私とすごく近い考え方をしてはったんや！

私は戦争と女性アーティストや美術に関心がある。戦時下の歴史をどこか遠い異常な出来事としてとらえるのではなく、日常生活とつなげて考えることが大事だ。それは、塚﨑さんが大事にしてきた、地域（大阪）、戦争、在日朝鮮人をキーワードとした歴史研究と、とても近い視点なのではないか。ジェンダーやフェミニズムについて特に話したことはないが、私が塚﨑さんを大好きなのは、根本的な発想の仕方がとても近かったからではないか、と今になって思う。

最後にお会いしたのは、今年 5 月。ウトロで劇団タルオルムの「キャンパー」を見た時だった。大阪大空襲での朝鮮人の犠牲者と歴史を主題にしたこの演劇には、塚﨑さんを彷彿させる人物が登場していた。・・・本当にもっとお話ししたかった。

大阪城公園フィールドワークで、塚﨑さんを囲む阪大生たち、2019 年８月７日

●塚﨑さんからの最後の電話
飛田雄一

9 月 6 日、電話があった。10 日の青丘文庫研究会在日映画会（KCC）の打ち合わせだ。

今入院している。最近心臓の具合がよくない。心臓弁膜症であることが判明した。今の状況が落ち着いたら手術する予定だ。この業界（？）で元

気だと言われているのが飛田さんと私だ。飛田さんも気をつけて、というような話をした。10 日の集会を病院のWi－Fi状況がよければZOOMで報告をしてもいいという話もあったが、これはやめておこうということになった。

亡くなったのが 19 日。それから 2 週間後のことだ。訃報を聞いて力がぬけてしまった。

初めて会ったのがいつどこだったか、思い出すことができない。おそらく 1980 年代後半には、強制連行グルー地下工場跡をフィールドワークする「トンネル」グループで、私もそのメンバーだった。リーダーは、鄭鴻永さんと塚﨑さんだ。悪路をもろともせず、ずんずんと入っていく。

1990 年代には、「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会」が 1999 年まで計 10 回開催されたが、その交流集会にも塚﨑さんも私もすべて参加している。

その交流集会が諸般の事情で中止となり、2000 年からは各地の調査グループが主催者となって呼びかける形で開かれた。その集大成的なフィールドワークが、2006 年の済州島だ。済州島の日本軍施設についても塚﨑さんが第一人者で、防衛庁図書館などから資料を収集していた。飛行場跡、地下軍事基地跡などを案内してくれた。彼の足と口のスピードに難儀したことも覚えている。「強制動員真相究明ネットワーク」は活動を継続しているが、もちろん彼はその中心メンバーのひとりである。

青丘文庫研究会でもいっしょだった。報告者がいなくなると、その穴を埋めてくれたのも彼だ。困ったときの塚﨑だのみの面もあった。

2013年7月の「月報」に「母の死－「障害」者の姉と朝鮮人－」というエッセイを書いている。最後の部分で次のように書いている。

「母は朝鮮人が嫌いだった。母は戦後、親戚に頼まれ、姉を背負って東京の闇市に買出しにいったときに、朝鮮人に馬鹿にされたことにずっと腹を立てていた。当時の多くの朝鮮人よりも日本人である自分の方が「みじめ」と感じていたのだろう。だから、私が高校の教員になってから、朝鮮史関係の勉強を再開し、活字になった論稿などを実家に持ち帰ると、「あんたが朝鮮人の肩を持つ気がわからない。」と言い放った。でも、母が朝鮮人に対する「恨み」を相対化できない限りは、母の「みじめ」な「戦争」は終わらない、と私は思った。そして、母に理解を求めるかのように、下手な論稿を書き続けた。母が嫌っているからこそ、あえて日朝関係史を選んだという側面もあった」

このことは、塚﨑さんの研究のエネルギーのひとつであったのだろう。研究会、フィールドワークの度に塚﨑さんのことをこれからも思い出すだろう。辛いことだが、思いを重ねて歩んでいきたいと思う。

2005 年済州島フィールドワーク、アルツル飛行場給水塔跡 by 飛田

２０２２年神戸空襲を記録する会「刻銘追加式」で大阪空襲の朝鮮人犠牲者について報告。by 飛田

塚﨑昌之・著作目録（石川亮太作成）

（タイトル　　掲載誌　巻号　　年　　月　　ページ　）

1. 「本土決戦」と北摂地域：地下軍事施設の実態　戦争と平和（大阪国際平和研究所紀要）　4　1995　pp.42～58
2. 「神州不滅」本土決戦の実態--戦争指導者の戦中と戦後の無責任　戦争責任研究　29　2000　pp.23～37, 46
3. 大正飛行場―民衆を守れなかった「防空」飛行場(上)　河内どんこう（やお文化協会）　71　2003　1　未確認
4. 済州島における日本軍の「本土決戦」準備－済州島と巨大軍事地下施設　青丘学術論集　22　2003　3　pp.263～311
5. 戦時中の大日電線尼崎工場の中国人労働者について：『外務省報告書』にない中国人強制連行　歴史と神戸　42(4)[239]　2003　8　pp.1～13
6. 大正飛行場―民衆を守れなかった「防空」飛行場(下)　河内どんこう（やお文化協会）　72　2004　2　未確認
7. アジア太平洋戦争中、日本船で死亡した中国人船員について：大連汽船神戸支店の中国人船員からわかること　歴史と神戸　43(4)[245]　2004　8　pp.1～16
8. 朝鮮人徴兵制度の実態－武器を与えられなかった「兵士」たち　在日朝鮮人史研究　34　2004　10　pp.53～77
9. "歴史の接点"を訪ねる(20)戦前の大阪と朝鮮人(1)在日朝鮮人教育発祥の地 濟美第四小学校　Sai = 사이 = サイ　50　2004　pp.29～31
10. "歴史の接点"を訪ねる(21)戦前の大阪と朝鮮人(2)戦前、大阪で四回の総選挙に出馬した李善洪の生涯--「共生」社会を求めた朝鮮人の挫折 Sai = 사이 = サイ 51　2004　pp.28～31
11. 「本土決戦」準備と近畿地方--航空特攻作戦指揮と天皇の大和「動座」計画戦争と平和（大阪国際平和研究所紀要）　13　2004　pp.49～63
12. "歴史の接点"を訪ねる(22)戦前の大阪と朝鮮人(3)統国寺　Sai = 사이 = サイ 54　2005　6　pp.64～68
13. 1920 年代の在阪朝鮮人「融和」教育の見直し－濟美第 4 小学校夜間特別学級第 2 部の事例を通して　在日朝鮮人史研究　35　2005　10　pp.13～37
14. 1922 年大阪朝鮮労働同盟の設立とその活動の再検討　在日朝鮮人史研究　36　2006　10　ｐｐ.25～51
15. 1945 年 4 月以降の日本への朝鮮人強制連行－朝鮮人「兵士」の果たした役割　戦争責任研究　55　2007　3　pp.12～17
16. 水平社・衡平社との交流を進めた在阪朝鮮人－アナ系の人々の活動を中心に　研究紀要〈水平社博物館〉　9　2007　3　pp.1～38
17. 1920 年代，大阪における「内鮮融和」時代の開始と内容の再検討--朝鮮人「救済」と内鮮協和会・方面委員　在日朝鮮人史研究　37　2007　10　pp.23～52

18. 오사카성 부근에 남겨진 근대 한일 관계의 상흔 〔大阪城附近 に 残 る 近代韓日関係 の 傷痕〕 역사비평 83 2008 5 pp.374-408
19. 1934 年,『協和時代』の開始と朝鮮人－高級住宅街・東豊中住宅開発の朝鮮人労働者の動きから見えること 在日朝鮮人史研究 38 2008 10 pp.31～58
20. 大阪－済州島航路の経営と済州島民族資本－「済友社」・「済州島汽船」・「企業同盟」 在 日 朝鮮人史研究 39 2009 10 pp.29～60
21. 戦前期大阪における朝鮮人住宅問題－「不法占拠」クリアランスと共同住宅建設を中心に 在 日 朝鮮人史研究 40 2010 1 pp.91～127
22. 伊丹飛行場の成立の背景と戦時期の軍用飛行場の実態 地域研究いたみ 39 2010 3 pp.28～61
23. 大阪朝鮮労働総同盟、衡平社と水平社、タチソ（陸軍高槻地下倉庫）、李善洪、李春植、高峻石、高順欽、宋章福、崔善鳴、張応善、張錠寿 在日コリアン辞典（国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会、明石書店） 2010 11
24. アジア太平洋戦争中の大阪府協和会・協和協力会・興生会の活動と朝鮮人－戦時動員体制への「親日派」朝鮮人の対応を中心として 東アジア研究 54 2010 12 pp.19～46
25. かつての龍王宮周辺の様子 「龍王宮」の記憶を記録するために：済州島出身女性たちの祈りの場（こりあんコミュニティ研究会・龍王宮の記憶を記録するプロジェクト第 3（社会包摂）ユニット編、URP GCOE Report Series No.18、大阪市立大学都市研究プラザ） 2011 8 pp.22～26
26. 在日一世女性の祈りの場所・龍王宮をめぐる歴史 「龍王宮」の記憶を記録するために：済州島出身女性たちの祈りの場（こりあんコミュニティ研究会・龍王宮の記憶を記録するプロジェクト第 3（社会包摂）ユニット編、URP GCOE Report Series No.18、大阪市立大学都市研究プラザ） 2011 8 pp.41～51
27. 戦前期大阪における朝鮮人医療問題 在日朝鮮人史研究 41 2011 10 pp.23～67
28. 十五年戦争極秘資料集 補巻 41 大阪府特高警察関係資料（解説） 2011 12 未確認
29. 戦前・戦中期，大阪における朝鮮人宗教政策の変化と朝鮮人の対応－「朝鮮寺」と神社参拝政策を中心にして 東アジア研究 57 2012 3 pp.31～61
30. 1920～1945 年，大阪東成地域における朝鮮人の生活と鶴橋署 在日朝鮮人史研究 42 2012 10 pp.35～94
31. 戦前期の大阪の朝鮮人と選挙－四回の総選挙に立候補した李善浩を中心に 在 日 朝 鮮 人 史 研 究 43 2013 10 pp.5～58
32. 一九三〇年代以降の在阪朝鮮人教育－内鮮「融和」教育から「皇民化」教育へ 在日朝鮮人史研究 44 2014 10 pp.5～46
33. 在阪朝鮮人の定住化と生活に関する史的研究：一九一〇年から一九四五年、日本人との関係を中心にして 博士論文（関西大学、博士（文学）） 2015 3 未確認
34. 「本土決戦」体制と朝鮮半島南部・済州島 坂本悠一編『地域のなかの軍隊 7 植民地』（吉川

弘文館）　2015　5　pp.242～258

35. 1928年，昭和天皇の即位の「大典」に見る朝鮮人の利用と排除－朝鮮人土木労働者の動きを中心にして　在日朝鮮人史研究　45　2015　10　pp.5～36
36. 一九四〇―四一年、大阪における李垠・方子・玖の生活とその後の李玖の人生　在日朝鮮人史研究　46　2016　10　pp.39-74
37. 1928年、昭和天皇の京都での即位の「大典」と朝鮮人　朝鮮人土木労働者の利用と排除を中心として　差別の歴史を考える連続講座講演録（京都部落問題研究資料センター）　2016　年　度　2017　3　pp.117～141
38. 柳原吉兵衛所蔵史料に見る「大阪府内内鮮協和会」　在日朝鮮人史研究　47　2017　10　pp.23～69
39. 1920年代、水平社・衡平社との交流を進めた在日朝鮮人　全国水平社の姉妹団体・関西朝鮮人聯盟を中心に　差別の歴史を考える連続講座講演録（京都部落問題研究資料センター）　2017年度　2018　3　pp.111～152
40. 済州島に残る旧日本軍遺跡：南北分断の悲劇を生みだした日本軍の爪痕　済州島を知るための55章（梁聖宗・金良淑・伊地知紀子編、明石書店）　2018　9　pp.190 ～ 194
41. 戦前期、在阪朝鮮人と犯罪：日本人との比較を通じて　在日朝鮮人史研究　49　2019　10　pp.5～37
42. 日清戦争時の清国人俘虜の墓碑から見えてくること　小田康徳編著『旧真田山陸軍墓地、墓標との対話』阿吽社　2019　11　pp.146～154
43. 日清戦争の清国人俘虜と「大日本帝国臣民」の形成　演出された「文明」と「野蛮」の戦争　旧 真田山陸軍墓地研究年報　7　2020　2　pp.25～66
44. 朝鮮人徴兵制度について(第1回)「特別志願兵」制度の実態（もう一つの出陣学徒壮行会）　わ だつみのこえ（日本戦没学生記念会）　152　2020　7　pp.45～58
45. 吹田の戦争遺跡をめぐる　世代をこえて考える戦争と平和展実行委員会　2020　10　47p.
46. 朝鮮人徴兵制度の実態(第2回)武器を与えられなかった「兵士」たち　わだつみのこえ（日本戦没学生記念会）　154　2020　12　pp.33～47
47. 明治期以降、河内・摂津における「楠公遺蹟」の「発見」と「創造」：「臣民」教育・地域振興・観光　教育研究（大阪大谷大学教育学部）　46　2020　pp.1～26
48. 大阪空襲と朝鮮人：戦中、そして戦後　在日朝鮮人史研究　51　2021　10　pp.41～75
49. 大阪空襲と朝鮮人そして強制連行　大阪空襲75年朝鮮人犠牲者追悼集会実行委員会　2022　3　80p.
50. 1970年までの大阪の被差別部落と朝鮮人：大阪市日之出地区解放住宅への朝鮮人入居の経緯を追って　佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集　11　2023　3　pp.77～108
51. 関東大震災の流言蜚語と大阪の朝鮮人――そして最近の虐殺事件矮小化の動向に対する記憶の継承の重要性　人権と生活（在日本朝鮮人人権協会）　56　2023　6　pp.13～23

52. 関東大震災の流言蜚語と大阪の朝鮮人――そして最近の虐殺事件矮小化の動向に対する記憶の継承の重要性　関東大震災朝鮮人中国人虐殺 100 年に抗して植民地主義とジェンダーを問う！（青丘文庫研究会第 8 回映像を通して視る・まだ視ぬアーカイブを可視化する！資料集、2023 年 9 月 10 日在日韓国基督教会館）　2023　9　pp.29～41　『人権と生活』56 号所収の同名論文を加筆修正したもの
53. 韓国はなぜ『徴用工』問題にこだわるのか（うずみ火講座）　※DVD　DO―YAH 企画（制作）

（以下、不明：ネット上から拾った書誌、要確認）
54. 龍王宮・記録を残せなかった歴史に光を　Koco-ken 研究会通信　5　未確認　未確認　未確認　http://kocoken2009.blog68.fc2.com/blog-entry-56.html
55. 大阪への朝鮮人強制連行の概要とその特徴　－鉄鋼・港湾・運輸・造船関係を中心に－　朝鮮人強制連行調査の記録　大阪編？
https://rhtosaka.hatenablog.com/entry/2020/10/29/132702

朝刊［大阪］ 2023/10/14(土)
地域／地域

空襲犠牲の「空白」埋めた日々

塚崎昌之さん67歳 9月死去

在阪朝鮮人史や軍事史を研究してきた塚崎昌之さん＝吹田市＝が9月、67歳で旅立った。大阪各地で戦争の傷痕と朝鮮人の足跡をたどるフィールドワークを繰り返した、おだやかな語り口に、背筋をピンと伸ばした後ろ姿は、多くの人の目に焼き付いている。

「これ、実は中国の天津から戦時中に略奪されたものなんです」

晴天の大阪城公園。西の丸にある一対のこま犬を指さし、フィールドワークで案内してくれた塚崎さんが切り出した。昨年12月のことだった。

塚崎さんは、戦時中の新聞を読み込んで突き止めた略奪の経緯をこう綴けた。

1937年7月、日本は中国に全面戦争を仕掛け、天津市を爆撃。市庁舎前にあったこま犬が、空襲によって転がり落ちていたのを奪い、陸軍が「戦利品」として日本に持ち帰り、陸軍第四師団司令部があった大阪城に送った――。

大阪城公園でフィールドワークをする塚崎昌之さん（中央）＝2022年12月、大阪市中央区大阪城

大阪の朝鮮人強制連行研究の第一人者でもあった。府立山田高校＝吹田市＝の教諭だった60年代、市内にあった軍需施設や朝鮮人の強制労働の実態などを調査。その後、立命館大コリア研究センター客員研究員長年活動をともにした、「大阪空襲被災者運動資料研究会」代表の横山荒夫さん(82)は訃報に接し、「突然ぽっかりと穴があいたよう。テーマを深く掘る力にたけた人で、若い世代への継承にも力を入れていた。塚崎さんにやってもらいたいことは、まだたくさんありました」と語った。

自宅で大阪空襲の被害について説明してくれた塚崎昌之さん。自室には、資料や書籍が山のように積んであった＝3月、吹田市

2人が力を注いだのが、大阪への空襲による朝鮮半島出身の犠牲者の調査だった。長く注目されず、「歴史の空白」とされてきたことだった。

2020年、日本人の研究者や在日朝鮮人の有志らと「大阪空襲75年朝鮮人犠牲者追悼集会実行委員会」を結成。遺族や体験者への聞き取り、死没者名簿などから朝鮮半島出身の空襲被害者が約1200人いると推定した。調査の集大成となる冊子「大阪空襲と朝鮮人そして強制連行」を22年に刊行。編集は塚崎さんが担当した。

朝鮮半島出身被害者「一人でも多く記録を」

冊子の末尾では、空襲で母ときょうだい3人を亡くした鄭末鮮さん＝慶尚南道昌原市＝が、長くその体験を語ることができなかったことに触れ、「自分の本名もわからず、植民地の歴史も知らず、朝鮮人であることを隠して生きてきたため、自身の体験を語ることができなかったという。（中略）それは日本人の朝鮮人に対する不可視化にもつながった」と記した。

大阪市中央区の大阪国際平和センター（ピースおおさか）には、空襲犠牲者約9200人の名前を刻むモニュメントがある。だが、実行委の調査では、朝鮮半島出身者と判断できる名前は166人分しかないという。

「名前はその人が確かに生きた証しです」

塚崎さんは犠牲者の追悼集会や講演会で、何度もそう語っていた。

「朝鮮人は当時、創氏改名によって日本人風の名前を強制された。まだまだ空襲で亡くなった人は多いはず。一人でも多く見つけ出して記録してあげたい」

生前の取材に、そう語っていた。（大畑哲章）

毎　日　新　聞　2011.6.27（月刊）

〔第3種郵便物認可〕

汗と鉄 アパッチ駆けた闇を嗅ぐ

大阪城公園

大阪市の中心に105・6㌶の敷地を持つ大阪城公園（中央区）。戦後約20年間、公園の東部分には米軍に破壊された廃墟が広がっていた。1950年代、廃墟に窃盗団が出現する。当時、新聞をにぎわせた事件の片りんを探して大阪城公園を歩いた。

一緒に歩いてもらったのは、大阪近代史の研究家で大阪府立千里青雲高校の社会科教諭、塚崎昌之さん（54）。JR大阪環状線の森ノ宮駅から公園に向かうが、森ノ宮駅―京橋駅間は線路が高架でなく地べたを走っている。線路の両脇一帯は、大砲や砲弾を造る陸軍の兵器工場「大阪砲兵工廠」があり、一般市民に内部を見せないよう、この区間は高架計画から外されたのだ。

今、砲兵工廠の跡地にその存在を語るものはわずかしかない。「でも面白いものが残ってまして」と塚崎さんが案内してくれたのは、東外濠の南端（地図❶）。石柱が2本、土に埋まっている。よく見ると「陸軍省」と彫られている。「ここから先は陸軍省用地だという境界の印ですね。これを初めて見た時は驚いたなあ」と塚崎さんが石柱をなでる。終戦前日の45年8月14日、B29の大群が飛来し、1㌧爆弾の雨を降らせた。40万坪に及ぶ「東洋最大の兵器工場」は、この大空襲で壊滅。コンクリートと鉄の広大な廃墟と化した。

やがて近くの在日朝鮮人集落で「鉄が高く売れる」と評判になり、生活に困窮する人々は夜ごと廃墟に侵入して鉄を盗んだ。住む地を失い略奪部族となったインディアンになぞらえ、彼らは「アパッチ族」と呼ばれた。しかし、くず鉄といえど国の財産。大阪府警が取り締まりに乗り出し、警察との攻防が3年にわたって続いた。

「警察に追われたアパッチは、あれを渡って逃げたらしいですよ」と塚崎さんが指さす先には、内濠に突き出した水道管が（地図❷）。「梁石日の小説『夜を賭けて』に登場する場面です。彼はアパッチを経験して、それを基に書いたんです」。1895（明治28）年に設置され、アパッチの逃走経路にされるというハプニングを歴史に刻んだ水道管は、今も現役だ。

砲兵工廠があった場所を上から見ようと大阪城へ。城の裏側には、木立の間に小道が延びている。その突き当たりには石のテーブルと椅子があり、眺めのいい隠れ家的スポットだ（地図❸）。

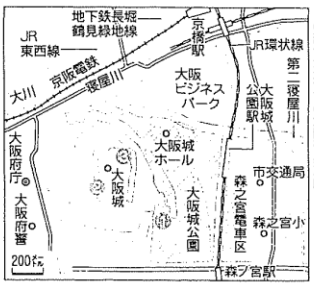
北側に大阪ビジネスパーク（OBP）の高層ビルが建ち並び、眼下に梅林と緑の森が広がる。「ここが終戦まで数万人が働く兵器工場だったんですね」と塚崎さん。兵器に使われた技術は戦後、トラクターなどに引き継がれた。

大阪城公園とOBPの間には第二寝屋川が流れる。川のほとりを歩きながら、塚崎さんは「アパッチはこの川を舟で渡り、盗んだ鉄も舟で運びました。積み過ぎて舟が沈んだことも。当時は真っ黒で、メタンガスがわく川でしたがね」。

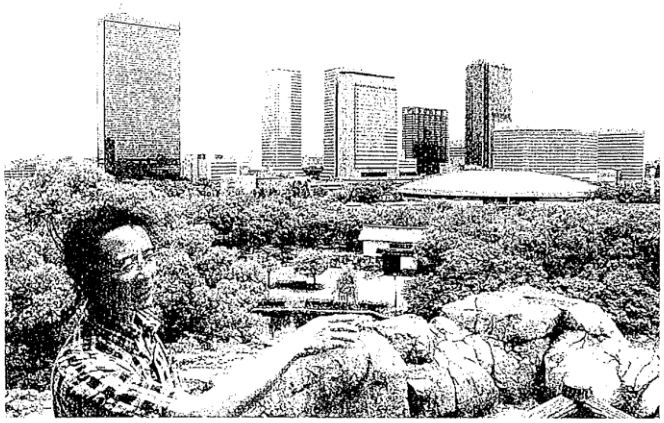
アパッチ族と警察の抗争は次第に激しくなり、59年8月、地元で「アパッチのやぶ医者」と呼ばれる医師が説得して窃盗をやめさせたという。ちょうどその頃、芥川賞作家、開高健がアパッチ族を題材にした「日本三文オペラ」を発表。アパッチの見事なチームワークの描写が圧巻だ。鉄泥棒という過酷な肉体労働に際し、屈強な男たちだけでなく、障害者や高齢者まで役割が与えられる。川沿いの遊歩道で、半世紀前の汗と鉄のにおいを想像してみた。

文・写真　和泉かよ子

＝次回は8月1日掲載



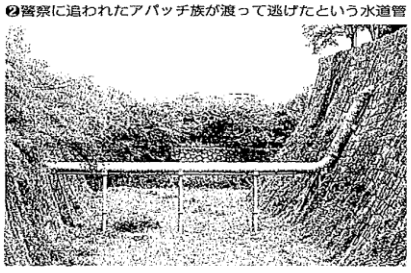
陸軍省用地を示す石柱　明治28年にできた水道管　眺めのいい隠れ家的スポットの部分がかつての大阪砲兵工廠



❸ここから見える一帯は、終戦まで東洋最大の兵器工場でした」と語る塚崎さん

❶陸軍省用地の境界を示す石柱。「さりげなく残っているんです」と話す塚崎さん

❷警察に追われたアパッチ族が渡って逃げたという水道管



大阪城公園戦跡ウォーク　ガイドの説明を聞きながら、第四師団司令部の建物など大阪城公園内の戦跡を巡る。7月10日（日）10時～12時半。大人300円、高校生200円、中学生以下は無料。申し込みは電話でピースおおさか（大阪国際平和センター）へ。☎06・6947・7208。

塚﨑昌之さん 追悼文集

2023 年 11 月 25 日発行
編集・発行　飛田雄一
（ひだ ゆういち、hida@ksyc.jp）
〒657-0051 神戸市灘区八幡町 4-9-22
神戸学生青年センター内
TEL 078-891-3018 FAX 078-891-3019